

【完結済】使物語～なで
こエンジェル～

燃月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千石撫子による暦お兄ちゃん陥落大作戦。

とある経緯から阿良々木暦と千石撫子の二人は、遊園地へ行くことに——あの手この手で獲物を仕留めんとする蛇と化した撫子。果たして、阿良々木くんの貞操はどうなってしまうのか!?

基本、阿良々木くんと撫子がいちやいちやしてるだけの物語です。阿良々木くん×ガハラさんのペアしか認められないという方はお気を付けてください。

※Arcadiaとの重複投稿です。また其方の方では「ミドリ」の名義で投稿させ

て頂いております。

目次

なでこエンジェル〜その1	1
なでこエンジェル〜その2	20
なでこエンジェル〜その3	39
なでこエンジェル〜その4	52
なでこエンジェル〜その5	69
なでこエンジェル〜その6	90
しのぶデビル〜その1	103
しのぶデビル〜その2	116
なでこエンジェル〜その7	133
なでこエンジェル〜その8	147

なでこエンジェル～その1～

（001）

千石撫子。

そもそもは、下の妹、月火が小学生だった頃の同級生で、数多くいた友達の一人。時折、阿良々木家に遊びに来ることがあり、僕と月火（火憐含む）が同室ということもあつて、遊びに付き合わされて顔見知り程度の仲になったのだが、所詮、顔見知りなのであつて、友達と呼ぶには疑問が生じる、そんな不確かな関係だった。

月火との関係も、中学が別々になったことにより途切れてしまい、必然的に僕との接点もなくなった。

ところが、蛇に纏わる一件が切っ掛けとなり、僕と千石は数年ぶりに再会するに至る。蛇が結んだ縁というアレだけど、それが合縁奇縁となつて、僕と千石は長い期間を経、再度交流することになったのだ。

今では、僕の数少ない友人の一人。僕のことを『お兄ちゃん』として慕ってくれていて、可憐で内気な女の子である。今更説明するまでもないが、『お兄ちゃん』と言っても、

あの傍迷惑で破天荒な肉親の愚妹達とは違う、僕にとって大切な『妹的存在』だ。

そんな、目に入れても痛くないほど可愛い存在である千石と、この度、二人でお出かけすることになった。

行き先は遊園地。無論、デートなんて事はなく、僕の役回りは付き添いの保護者みたいなものだけ。

なぜ二人で遊園地に行くのかと、当然の疑問が出てくると思うので、簡潔に説明させて貰う事にする。

事の起こりは、僕がある重大な任務を千石に依頼したのが発端となる。任務の内容は、あるキーワードとなる台詞を、標的となる人物の口から引き出すという、諜報活動めいたモノだ。その成功報酬として千石が要望したのが、『遊園地に行きたい』というものだった。

しかし相手は、幾多の挑戦者たちが無残に散っていった難攻不落の鉄壁で、千石も善戦はしたものの、残念ながらその任務を果たす事ができなかった。

本来なら、任務失敗という事で千石の報酬は無しになるはずだったが、結局は千石の奮闘を労い、健闘賞という形で遊園地に連れて行ってやる事になったのだ。

情報保護の観点から、少々抽象的な説明になってしまったのは大変申し訳ないが、経緯は大体こんな感じである。

でもまあ、千石も遊園地に行きたいだなんて、変に大人びていないと言うか、年相応の子供らしきがあつて、ほんと心が温まるよな。本当は僕なんかとじゃなく、同年代の友達と一緒に行けたほうが楽しいのだろうけど、そこは我慢して貰うしかない。

そう思うのなら、月火も一緒に連れていけば済む話なのかもしれないが、今日は千石へのご褒美ということもあり、お金の負担は全て僕が賄うつもりなので、それだけで手一杯なのだ。

まあ、幾ら財布に余裕があつたとしても、あいつに奢つてやるつもりなんか毛頭ないけど。妹の扱いに関してはシビアな僕だ。

けれども、バイトもしていない、親からのお小遣いのみで生活している僕としては、少々手痛い出費であつたのは間違いない。

遊園地の入場料（園内フリーパス）の値段を事前に調べておいたのだが、手持ちの財布の中身では足りなかつたぐらいだ。

その為、親に頼んで僕個人の貯金（財源は全てお年玉だ）から差つ引く形で、軍資金

は確保してある。

通帳、キャッシュカードは親が保管しているので、自分では引き出せなかつたりする。不便ではあるが、自分で管理していると、恐らくきつと……いや絶対、『肉体美を追求した芸術の参考書』の経費に消えていた筈だ。

そんなこんなで、手荷物のチェックをしていると携帯電話から着信音が鳴り響く。画面を確認すると、千石からだ。彼女は今時珍しく携帯電話を所有していないので、これは自宅からの電話になる。

手早く、通話ボタンを押し、電話を耳にあてる。

『もしもし、暦お兄ちゃん？』

「よう。千石」

千石の囁くような小さな声に、気さくに返事を返す。

『お、おはよう、暦お兄ちゃん。今日はどうぞ宜しくお願いします』

僕の声に安心したのか、幾分、声に張りがたようだ。やっぱり千石は礼儀正しくていいよな。

「おう、おはよう。もう準備できたか？」

『うん。ばっちりだよ』

主語のない会話だったが、僕達二人には、これで十分に意味が通じていた。と言うのも、予め僕に電話をかけてくるように頼んでいたからなのだけど。

僕と千石の家は、同地区のご近所なので、下手に駅前などで待ち合わせするよりも、そのまま自宅前で合流したほうが勝手がいい。だから千石の準備が出来次第、僕に連絡するように頼んでおいたのだ。

それならば、変にお互い待つこともないし、僕が自転車で千石の家に向かえば、そのまま二人で自転車で乗って駅まで行くことができる。

自転車を持っていない千石への配慮でもあったし、無理に待ち合わせをして、徒歩で向かわせるのもどうかと思つたからだ。

あと何よりも、千石は待ち合わせというものをちゃんと理解していないふしがあるの
で、その対処でもある。

かなり前の話になるが、僕が学校から出てくるのを四時間近く待ち続けた前科がある、
気が長い女の子なのだ。

考え過ぎかもしれないが、平気で夜明け前から待ちかねない。後悔先に立たずとも言う
うし、同じ轍を踏まささない為にも取れる策はとつておいた方がいい。

「そうか、じゃあ今から向かうよ」

『うん。わかつた』

準備完了の合図を伝えるだけの、会話目的の電話じゃないので、手早く要件を済ませ電話を切る。

服装はいつもと代わり映えしない、半袖のパーカーにジーンズ姿。ま、動き易い服装なのだから、問題ないだろう。既に準備をしてあった鞆を引つつかみ、リビングに居る月火に悟られないように玄関に向かう。

細心の注意を払って、音を立てずに扉を開け、無事脱出成功。

月火の声が聞こえた気がするが、きつと気のせいだ。

因みに火憐は不在だ。今朝方、僕がまだ布団の中で気分よく眠っている最中——鳩尾を踏みつけ、蹴り（『叩き』と同義）起こした上で、

「……兄ちゃん。あたし負けないから。絶対帰ってくるから………約束する。大丈夫。心配すんなって」

と、一方的にそんな不穏当な台詞を残して、颯爽と駆けていったのは薄っすらと覚えている。兄を足蹴にしやがった恨みは鮮明にだ。

だけど心配した覚えなどない。まあ約束したからには、ちゃんと帰ってくるのだから。

余計な厄介事だけには巻き込まれないで欲しい。言うまでもないが、これは優しさではなく、僕に面倒が降りかかるのを懸念しての願いだ。

そんな訳で、手早く自転車を引つ張り出し、逃げるように千石の家に急行したのだ
た。

（002）

仄かに温かい早朝の日差しを感じながら、悠々と自転車を走らせる。徒歩でも十分圏
内の距離。自転車だと、ほんの数分足らずの時間で到着するので、焦る必要もなかった。

こちら周辺はよく八九寺と遭遇するラッキーポイントなのだが、残念ながら今日は見
当たらない。と言っている間に、最後の曲がり角に差しかかる。もう千石の家は目と鼻
の先だ。

角を曲がると、千石の家の外観と一緒に、軒先で僕を待つ千石の姿も見えた。

紫外線対策か、はたまた視線避けのためか、黒い水玉リボンがついたカンカン帽（か
たく編まれた、小さなつばの麦わら帽子の事だ）を被っているのが印象的だった。以前
に被っていたキャスケットの帽子よりも断然トレンドイード。

最後の直線でそんな事を思いながら自転車を漕いでいると、千石も僕に気付いたよう
で、顔を綻ばせてくれる。

「きよ、きよきよ今日は、よ、よよよりよしく、お、お願いします」

僕が停止するなり、千石は奇怪な台詞と共に勢いよく腰を曲げる。その拍子にぼりと帽子が落下した。

近所に住む年下の女の子に、帽子が落ちるほどの角度で頭を下げられてしまった。

さっきの電話では、もつと落ち着きのある対応がとれていた筈なのに……難儀な奴だな。なんでコイツこんな緊張しているんだ？ いや、そんな事より、今の構図は大変よろしくない。

自転車のスタンドを立て、帽子を拾い上げ、軽く手で汚れを払ってから渡してやる。

「ご、ごめんなさい。曆お兄ちゃん」

「……なんでそんな畏まってんだよ」

「ごめんなさい」

「……謝れたら余計に困るんだけどさ」

「ごめ……ううん。今日は曆お兄ちゃんに撫子の我が侘を聞いて貰うんだから、失礼のないようにって思ってたら、緊張しちゃって……」

「いや、千石。そもそも先に我が侘を言ったのは僕なんだし、これは千石が頑張ってくれた事に対するご褒美なんだからさ。気にする必要なんてないんだぞ」

「うん。ありがとう、曆お兄ちゃん。改めまして今日は宜しく願います」

今度は、軽くぺこりと頭を下げる千石だった。堅苦しいような気もするが、それで千石の気が楽になるのなら、それでいいのだろう。

素直にお礼が言えるというのは、それだけで美点だし、お礼を言われて嬉しくないはずがない。

千石の憤まじやかな物腰を少しでもいいから、妹達に見習って貰いたいものだ。千石が本当の妹なら猫可愛がりしてしまうだろうな。

「おう、お願いされた。今日は一緒に楽しもうな」

「うん。曆お兄ちゃん」

花が咲いたように微笑んで頷く千石は、一段と可愛らしく見えた。

その要因は、千石の今日の服装にあるのかもしれない。自分の服装に関しては無頓着な僕だが、人様の着る私服姿には興味津々なのだ。

依然、羽川の私服姿は見るには至っていないけど。

それはさて置き、今日の千石の服装を紹介しよう。

上半身は、薄く淡い緑色の総レースの半袖で、胸元にはアクセントとなる小さなリボンが施されている。網目から中に着込んだ服が薄っすらと透けて見える装いで、風通し

もよさそうだ。

その中に着込んでいるのが、Aラインの真っ白な小花柄のキャミワンピース。少々スカートの丈が短いようで、陶器のような滑らかで真っ白い素足が露になっていた。

足元は涼しげなサンダルを履いており、その為、生足が際立っている。

全体的に肌の露出が多い大胆なコーディネートだ。

またも危うく、僕の為に恥ずかしいのを我慢して、できうる限りのお洒落な格好をしてくれたのかと見当違いの思い込みをしてしまう所だった。

いやはや無防備と言うか何と言うか……まあ、本人はただ単に、暑さ対策で薄着にしただけなんだろうけど。

それに露出の多さは、健康的な出立ちと言い換えることもできる。

しかし妙に胸元が開けていたり、生地自体が薄いので目のやり場に困ることに変わりはしない。

あと装飾品として、首からはネックレスが下げられており、胸の辺りにある宝石がキラキラと煌めいていた。しなやかなデザインで派手すぎず、胸元を華やかに彩っている。

それと、腰にはいつも通り、千石お気に入りウエストポーチを装着していた。

うらむ……ポーチは年相応の可愛らしさがあるのに比べて、ネックレスに関しては、大変申し訳ないが千石には少し早い気がする。

別に似合っていないと言うわけではないのだが、小学生が口紅を塗っているような……少々不釣合いな感じが否めない。

それこそ、千石のお母さんの持ち物だと言われた方がしっくりくる程の高価そうなものだからだ。

あの宝石つてダイヤじゃないのか？

僕に真贋を見抜ける程の審美眼はないのだが、とても模造品には見えない。

まあ、千石の服装、身なりに関してはこんなところだ。

それとは別に、目に見えて気になると言うか、触れなければならぬ所が二点程あるので、順を追って言及してみよう。

まず、一つ目。

「千石。お前が髪を括っているというか、編んでいるの、初めて見たよ。珍しいな」
麦わら帽子に目がいって最初は見落としていたが、今日の千石の髪型は三つ編みだった。

艶のある黒髪が半分に分けられ、丁寧に編み込まれている。丁度イメチェン前の羽川

(今はショートカットだけど) みたいな感じ。

「そ、そう……羽川さんに教えてもらったんだけど、べ、別に今日のためにとっておいた髪型じゃないよ」

「ふくん。そうか」

なるほど。羽川直伝の三つ編みだったのか。だとすれば羽川の髪型を思い浮かべたのは偶然ではなく必然だったわけだ。

千石が何に対して弁明しているのかは解らないが、そりや、髪型ぐらい日によつて変えるだろうし、今日たまたま三つ編みにしたい気分だったのだろう。

女の子なんだし、髪型をアレンジするのはいいことだ。女子がヘアスタイルを変えるのは好きだし大歓迎である。

「ど、どうかな?」

僕を窺うように下から目線で見上げてくる。

ちよつぱり不安そう表情を見てみると、Sでもないのに嗜虐心が刺激され、思わず苛めたくなつてしまう。か弱く繊細な千石を苛めるなんて有り得ないけど。

「うん。似合つてる。千石の大人しそうな雰囲気によくあつてるし、可愛いな」

「わ……はわ、はわわわ」

頬に手をあて、狼狽える千石だった。恥ずかしがり屋さんだし、面と向かつて褒めら

れる事に免疫がないのだろう。

そして気になる点、二つ目。

「なあ、千石。そのバスケットは何なんだ？」

言うまでもないが、バスケットと言っても、籐《ラタン》で出来たピクニックバスケットである。

片手で持ち運べる程度の大きさで、蓋の淵には赤と白で出来たチエックの布が巻かれており、趣味のよい一品だ。

一応片手で持てるサイズだが、千石が両手でしっかりと持っていたのがずっと気になつていた。

「えっと、お弁当。今日の昼食が入ってるんだよ。暦お兄ちゃんの分もあるから心配しないでね」

「マジか。それは却つて気を使わせちゃったみたいで悪いな」

昼ご飯なんかも、遊園地にあるレストランで奢つてやるつもりだったのに。こんな所にまで気が回るなんて流石千石だ。

「ううん。そんなことないよ。そんなの気にしないで」

それに何とも奥床しい。ほんと、うちの妹達に爪の垢を煎じて飲ませたい。

「でも、今日は暦お兄ちゃんとデートできるなんて、撫子、嬉しいな」

「そうなのか。ま、そうだな」

この物言いでは、僕と一緒に出かけられる事自体が嬉しいという風に受け取れてしまうが、千石が本当に言いたいのは、遊園地に行けるのが嬉しいと言うことなので、そこを取違えてはいけない。

千石はこういう不用意な発言で、同級生の男の子達を魅惑していたのかもしれないな。天然とは恐ろしいものだ。

あと一緒に出かけるだけで、デートなんて言葉を用いるのはどうかと思ったが、これぐらいの年の女の子からしたら、おませに背伸びした表現を使いたいものなんだろう。

「僕もこれで、年甲斐もなく遊園地が楽しみで、遠足前の小学生みたいに、なかなか寝付けなかったんだぜ」

「ふふ、そうなんだ」

「千石も目の下、ちよつとクマが出来てるぞ。さてはお前も眠れなかったのか?」

「え? うん。今日着ていく服を選ぶために夜通し悩んでたわけじゃなくて、撫子も、楽しみで眠れなかっただけだよ」

なぜそんな例を出したのか解らないが、まあ、結局は僕と一緒にだつてことなんだよな。

「一応、親御さんに挨拶した方がいいか？」

「え？ 曆お兄ちゃん、それって『娘さんを僕に下さい』ってことかな？」

「違うよっ!! お前はテレビドラマの見すぎだ! 何でこの流れで、いきなりそんな大イベントが発生すんだよ! 大切な娘さんを預かるんだから、保護者的立場としての責任もあるし、挨拶しといた方がいいかと思っただけだ!」

びつくりする発言をする奴だな。思わず内気な千石に対し本気でツツコミを入れてしまったじゃないか。

あれ……ちよつときつい言い過ぎたかもしれない。千石がしょんぼりして、うな垂れてしまった。つてあれはボケではなかったのか？

駄目だ。千石の要求している答えが見つからない。

ああ、そうか! あれはノリツツコミを希望していたのか。

だが『進んだ時計の針を戻すことはできない』のだ。今日これからの行いで挽回していくしかない。

「……………保護者」

千石は、ポツリとそんな小さな眩きを漏らす。なぜか不本意そうな顔でちよつと怖い。

「……でも、同級生の女の子と遊びに行くって事にしてあるから……ちよつと、困るかも」

言葉を続けた千石は、更にその表情を曇らせていた。

「そうなのか？ 別に後ろめたい事じゃないし、正直に言ったらいいのに」

でも確かに千石が、僕たちの関係を親に説明するのは難しいかもしれない。

なんで『同級生だった友達のお兄』と遊びに行くんだって話だ。

未だ千石の両親とは、電話での接触もないわけだし、突然見ず知らずの男が、「一緒に遊園地に行つてきます」なんて言つても、安心させる所か、余計に心配させてしまう結果になるか……。

僕と千石は至つて健全な関係なのだが、妙な勘ぐりをされても面白くないし。

うゝむ、そこまでは頭が回っていなかったな。

「んゝ。まあ、それなら仕方ないか」

「でもちゃんと、今日は遅くなるって言つてあるから大丈夫だよ」

「そうか。なら心配ないな」

ま、なるべく早く帰るつもりだし、責任もつて家まで送り届けるのだから問題ない。

「うん。もしかしたら今日は帰らないとも言つてある」

「待て！ 帰るよ。ちゃんと今日中に帰つてくるよ！」

千石は不測の事態に備えて、念には念を入れただけなのだろうけど。それは心配し過ぎである。

だけど『蛇』の一件では、塾で一夜を明かす事になったのだから、可能性が皆無というわけではないのか……いやいや、あんな事態がそうそう起こって堪るか。

と、何時までもこうして立ち話をしていてもしょうがない。さつさと駅に向かわなければ。

「よし、千石。出発するぞ」

「うん」

千石からバスケットを受け取り、自転車の前カゴに入れてしまう。

それから僕がサドルに跨り、ふらつかないように地面を踏みしめ、千石が後部座席に腰を下ろすのを確認してから、自転車を漕ぎ始める。

「千石って自転車乗るのは初めてだよな。なるべく揺らさないように気をつけるけど、しつかり掴まってるんだぞ」

「そうだね……うん。そうする」

そう言つて、力いっぱい僕の腰に手を回す千石だった。

従順な彼女は、僕の言葉の通り『しつかりと掴む』ことにしたようだ。

千石の控えめな胸が押し付けられているのはその為である。

なぜか、脇をしめて、無理やり胸を強調するような不自然な格好になっているのも、「怖いよ」と言いながら、身体をこれでもかと密着させてくるのも、自転車に慣れていない、恐怖心からくる畏縮みたいなものなのだろう……………。

これが千石相手でなければ、ともすれば、色仕掛けされているんじゃないかと勘違いしかねない状況だな。

うん。僕が健全な判断力を持った、実直で紳士な『お兄ちゃん』でなければ危なかった。

そこからは、千石が喋れる状態でもなかったもので、特に会話らしい会話もなく駅に向かっていく。

忍に血を分け与えたのが、丁度昨日だった事もあり、身体能力が底上げされていて、いつも以上に足取りは軽い。

千石の華奢な体格は見た目通りの軽さで、重さを感じることはなかった。

しかしながら千石の、僕に抱きつく力は尋常ではない。

この子の何処にそんな力が隠されているのか、全く、不思議なものだ。よほど自転車に乗っているのが怖いのだろう。

そうこうしている内に、駅近くの繁華街に差し掛かる。

そこで自然と目に入ったショーウィンドウには、自転車から落ちないように、必死に僕にしがみ付いている千石の姿が映っていた。

なんとも微笑ましい光景だ。

………光景なのだが、でも、なぜだろう………。

それが、被食者となる獲物を捕まえて押さえ込み、とぐろを巻いて絡みつき締め付ける捕食者——あたかも、腹を空かした蛇が、食事をする為の下準備に精を出している姿に見えてしまったのは、一体全体どういふことなのだろう？

なでこエンジェルとその2

（003）

遊園地の名前は『エンジェルランド』。アミューズメント型のテーマパークである。

2年程前に大幅全面改装を行い、リニユールオープンに伴って『エンジェルランド』に改称したらしいのだが、元々の名前は『ランドセルランド』と言ったそうだ。

その頃——まだランドセルランドと呼ばれていた頃は、その前衛的かつユニークで可愛らしい名前からは想像もつかない、過激なアトラクションで埋め尽くされていたらしい。

一言で言い表せば、“阿鼻叫喚”。

情報雑誌などには、『天国に一番近い遊園地』と紹介・揶揄されていた程だ。

この場合の『天国』とは、あの世……地獄と言い換えても差し支えない。別に事故が起こって死人が出たという訳ではなく、それ程までにスリリングな体験が約束されていると言うことなのだけだ。

恋人同士で行くと、その半数は別れる結果になると言う都市伝説まで存在する。その

為、カップルで訪れる者は殆どいなかったようだ。

そんな、型破りな遊園地ではあるが、どう罷り間違ったのか、それなりの盛況を博し、順調に時代の波に乗っていたらしい。

だがしかし、不況の影響で徐々に業績が悪化し、このままでは閉園も免れないという状況になり、起死回生をかけ一念発起し、リニューアルに踏み切ったそうだ。

エンジェルランドという名前は、『天国に一番近い遊園地』からの連想なのだろう。

今では、恋人や家族連れ、県外からの学生団体、老若男女、誰でも楽しめる万人受けする遊園地へと変貌するに至ったとのことだ。

電車に揺られること一時間半と少し。3回の乗り換えと、バスの経由を経て、目的地である遊園地、エンジェルランドに到着した。今は丁度10時になったぐらい。開園は9時なので、既に入場口は人で賑わっていた。

まずはチケット売り場に向かい、二人分の入場料を支払う。

入場チケット自体がそのまま園内パスポートになっているので、中のアトラクションは全て乗り放題だ。

となれば、乗れば乗るほど元手が取れる——なんて、せせこましい考えはなしにして、

千石のペースにあわせて、ゆっくり楽しめばいいだろう。

勿論、今日は千石へのご褒美で来ているのだから、彼女にお金を出させるなんて真似はしない。

「……暦お兄ちゃん、本当にいいの?」

予想はしていたが、僕が全額負担するのを気に病んでくれ、千石の全身から申し訳ないオーラが漂っていた。

「当たり前だろ。今日はお前へのご褒美で来てるんだから、これぐらいさせてくれ」

「……………うん。暦お兄ちゃん」

「さ。今日は楽しもうぜ、千石」

「暦お兄ちゃん。本当にありがとう」

律儀に頭を下げてお礼してくれる千石だった。折角の遊園地なのだから、気兼ねなく、心の底から楽しんで貰えたらなと思う。

とにもかくにも、逸る気持ちを抑え、入場ゲートに向かう。これでいて僕も、年甲斐もなく遊園地に来て、浮かれているのかもしれない。

入園する際に、チケットと引き換えで、園内の地図や概要が書かれたパンフレットを受け取った。

園内には、もう人の姿が結構あり、楽しそうな笑顔で溢れかえっている。家族連れや、友達同士、カップルの姿など客層は満遍なくといった感じ。

あとよく目に付くのが、この遊園地のトレンドなのか、天使の輪を頭に乗っている人がちらほらといた。黄色い輪っかが宙吊りになって浮いている。

要はネズミの国でも見かけられる、ネズミ耳のカチューシャみたいなものだ。

一番近い表現は『灰羽連盟』の光輪を固定する器具のような感じなのだが、多分伝わらないだろうな。

何にしても、僕が装着するのは、少し恥ずかしいかもしれない。

また、旧遊園地のキャッチフレーズ——『天国に一番近い遊園地』は今現在でも有効のようで、園内のアトラクションの高度には、かなりこだわりがあるようだ。

ジェットコースターやフリーフォール、観覧車などは世界有数の高さ誇るらしい。中でも、観覧車の大きさは、離れたこの場所から見ても圧倒されるものがある。その偉観は圧巻だった。

「ふくん。なかなか施設も充実してるんだな。結構いろんなアトラクションがあるようだし……千石は何に乗りたいたんだ？」

僕は、手元のパンフレットを見据えつつ、千石に問いかける。

「うくん……何がいいかな」

僕がパンフレットを開いて確認していると、横合いから千石が覗き込んでくる。

千石にも同様のパンフレットが配られたはずなのだが………まあこっちの方が、指差し確認なんかも出来て一緒に相談しやすいし、都合がいいか。

二人で顔を寄せ合っている姿は、周りから見ればきつと仲のいい兄妹みたい見えるんだらうな。

そうして、しばらく悩んだ末に千石が出した答は意外なものだった。

「やっぱり……ジェットコースターがいいかな」

「千石……大丈夫なのか？ ……此処のは特に怖いらしいぞ」

「うん。大丈夫」

「へえ、そつか……」

本心として、僕が大丈夫じゃない。嫌いとは言わないまでも、あまり好き好んで乗りたいくはないのが正直な所である。

「寧ろ好きだよ」

「………そうなんだ」

思いの他と言うべきか、意外や意外、千石は絶叫マシンなどの過激なアトラクショ

ンを苦手としている訳ではないようだ。あんなに自転車を怖がっていたのは何だったんだらうか……………。

「うん。これ乗ってみたかったの。これだけは外せない」

有無を言わせぬ、確固たる決意を感じさせる声。こんな意思の強い千石はなかなか見れたものではないな。

そもそも遊園地に行きたいというのは千石たつての希望だったのだから、不思議でも何でもないか。

遊園地の乗り物の大半は、スリルを味わうもので占めてるわけだし。

今日は千石に付き合おうと決めた以上、ここで引き下がるわけにはいかないよな。

腹を括り、ジェットコースター乗り場に向かう僕達だった。

く004く

人は見かけによらないとは、よく言ったものだ。

好きと言つても、それなりに怖がりはするだろうと思つていたのだが…………千石の絶叫マシーンへの恐怖心は皆無だった。

僕が悲鳴に近い叫び声を上げているのに比べ、千石は叫ぶと言つても歓声なのだ。

ジェットコースターで両手を上げるぐらい朝飯前といった感じ。

まあ内気少女の照れ屋ちゃんである千石が、そんな事するわけないけど。

千石の要望通り、ジェットコースターに乗った後も、バイキング（大きな船の乗り物が、振り子のように大きく揺れるアレ、ここのは一回転した）、フリーフォール（真上に上昇して垂直急降下するやつ）と、過激なアトラクションが続いて、僕は疲弊気味。千石はけろっとしたものだ。

そして次に僕と千石が訪れたのは、『迷宮ダンジョン』。

迷宮といっても、ただの迷路なのだけど、僕的にはひと息つけそうで願ったり叶ったりだ。

待ち時間もそこそこに、係員の誘導のもと、『迷宮ダンジョン』のスタート地点に案内される。

「へ、暦お兄ちゃん」

前の組が出発したら僕等もスタートと言う間際になって、僕の袖をくいくいと引つ張りながら、千石が呼びかけてきた。

「どうしたんだ千石?」

「お……お願いがあるんだけど、い、いいかな?」

伏し目がちなのに加えて、千石の顔が麦わら帽子のひさしに遮られてよく見えないが、なんだか恥ずかしそうだ。

ちらりと垣間見えた顔の色は真つ赤だった気もするし、声も少し上擦っている。

「千石のお願いなら何でも訊いてやるぞ。何でも言ってくれ」

しかしながら千石の方から僕にお願いなんて珍しい。千石の頼みなら無条件で叶えてやりたくなる。

「あ……あの………て………てを………」

「て？」

「……手を繋いで………欲しい………な………」

「ん？ 手を？ おお。何だ、そんなことか」

「いいの!？」

「何だよ、これぐらい構わないぜ」

千石は、もしかしたら暗所恐怖症なのかもしれないな。中は薄暗い迷路のようだし、もし逸れでもしたら大変だ。

千石は携帯電話も持っていないから合流するのにも一苦労しそうだし、最悪——園内放送で呼び出すなんて恥ずかしい真似を、しなくてはいけないかもしれない。

これは、手を繋いでいた方が安全だし、得策だろう。

「ほんとにいいの？」

「なんだよ、僕と千石の仲だろ」

「な、な撫子と曆お兄ちゃんとの……仲……わ、わ、はわわわわ」

急に千石が情緒不安定になってしまった。遊園地に来てテンションが上りきってしまっただろうか？

千石の生態はまだ謎に満ちている。

「ほら、千石」

僕はそう言っ、左手を差し出す。ちなみに右手には千石から預かったバスケットを持っている。

「じゃ、じゃあ……お手を拝借します」

なんかその表現では、また違った意味に聞こえてくるな。一本締めをしなくちやいけないような気がしてくる。

ともあれ、千石が控えめな所作で僕の手の平に、ひんやりとした冷たい指先をそっと触れさせる。

僕の手はそこまで大きくないのだけど、千石の手の小ささと比べると、相対的に大きく感じられた。

なんだこのちっこい生物は！

ま、手を繋ぐことは彼女である戦場ヶ原は当然として、なぜかあの後輩……神原ともあるし、今更恥ずかしかることもでもない。

丁度、僕達の番となったので、添えられているだけだった手を、僕がしっかりと握つてやり、千石の手を引いて、ダンジョン（アトラクション的に）に突入したのだった。

（005）

「これは、凄いな」

ダンジョンに足を踏み入れた、僕の率直な感想だった。

辺りは薄暗く、等間隔に設置された松明の灯りだけが頼りとなっている。とは言っても本物の松明ではなく、偽物だと判る光源——人工灯なのだけど、それでもよく見なければ、本物と見まがう完成度だ。

松明で照らされている洞窟を模した通路も、かなり精密かつリアルに出来ている。

通路の広さは、僕が両手を広げたら両端に手をつけるぐらい。二人並んで歩くぐらいならば不自由しない広さが確保されている。

「なんだか、ドラクエの世界に迷い込んだみたいだね」

「だな」

千石の言うとおりの内部の構造は、RPGのダンジョンを彷彿とさせた。

作り物ではあるが、トカゲのような生物が岩壁を這い回り、頭上では蝙蝠が飛び交っている。

本当にダンジョンの中を歩いているのではと、錯覚してしまうほどの臨場感がある。

「そういうえば千石ってドラクエ好きなんだよな」

千石もこれで、王道RPGはしっかりと押さええている子なのだ。

中でもドラゴンクエストのナンバリングタイトル作品は、僕の知る限りではドラクエ7まではプレイ済みだったはず。

プレステ2は所有していないようなので8は未プレイだと思われる。

「うん。ドラクエは好きだよ。中でも4が一番好きかな。暦お兄ちゃんは？」

「僕はやっぱり、5だな。3も捨てがたいけど。モンスターが仲間になるなんて衝撃的だったぜ」

「撫子も4の次は、5が好きかな」

「千石はなんかフローラってイメージだよな」

「え？　なんで？」

「いや、物静かで控えめな感じが千石と似てるだろ」

私見ではあるけれど、羽川がピアンカのイメージで、戦場ヶ原はDS版に登場したフ

ローラの姉、デボラだ（DS版のドラクエ5はやったことないけど）。神原は誰だろう？新機軸すぎてあいつにあうキャラが見つからない。八九寺はなんか可愛いマスケット的モンスター、スライム系統だろう。

スライム八九寺に、一度くらい噛みつかれたいものだ。

「そうかな……ねえ曆お兄ちゃん。曆お兄ちゃんは結婚する時はどっちを選んだの？」

千石が僕に訊いているのは、ドラクエ5屈指の重大イベント——ビアンカとフローラ、この2人の美女の内から結婚相手を選ぶという究極の選択のことである。『天空の花嫁』とサブタイトルにもなっている通り避けては通れない道なのだ。

この生涯の伴侶を決めるといふ局面に、決断を下せず苦悩した人も多いことだろう。関係ないが、ルドマンさん（フローラの父親）を選択して、彼を困らせたプレイヤーも数多くいるはずだ。

でも僕の答は決まっていた。

「勿論ビアンカ一筋だぜ」

「……………」

あれ？ 千石の反応がない。というか繋いでいる手の力が増したような気がする

……ちよつと痛い。それに空気が重くなった気も……と、しばらく無反応だった千石だが、ようやく口を開いて反応してくれた。

無視された訳ではないようで一安心だ。

「……り、理由は……なんで……かな？」

少し声に棘があるように感じるのはどうしてだろう？

「そうだな……子供達の髪の色が金髪じゃないと、なんか、しつくりこなくてさ」

フローラを結婚相手に選ぶと、生まれてくる子供（双子の兄妹）の髪の色が、青色になってしまうのだ。僕的にあの髪の色はない。

フローラと結婚すれば、ルドマンさんから、お金や防具の融資を受けとれるメリットが発生するけど、そこだけは譲れなかったのだ。

「千石はもしかして、フローラ派だったのか？」

なんか怒ってそうだったし、そう推測したのだけど……。

「ううん。撫子もビアンカ派だよ」

「あれ？」

では、何で空気が重くなったのだろう？ ううん、よくわかんないや。

「千石にも明確な理由があったりするのかわ？」

「うん、あるよ……」

千石は一拍の間を空けて、強調するように次の言葉を発した。

「だって、一度は離れ離れになっちゃった二人が、長い年月を経てから再会して、子供の頃からの想いが成就するなんて素敵だから」

なるほど。千石はビアンカの気持ちに同調しているのか。やっぱりこんな考えが出るる辺り、女の子だよな。

「まあ、確かに、幼少期のイベントがある分、ビアンカの方が有利だよな。思い入れが強くなるし」

幼少時代、一緒に冒険をしたアドバンテージは大きいだろう。

「な……なんだか……撫子と、暦お兄ちゃんみたい……だね」

「ああ、そっか。僕と千石も、数年ぶりに再会したんだもんな」

だからどうしたと言う話なのだが、なぜか満足そうな千石だった。

「にしても、結構寒いな」

外との気温差の所為もあるんだろうが、空調がガンガンに効いており、異様に肌寒かった。

それに時折、誰かに鋭い視線で見られているような気がして、背筋がゾクゾクする。嫌な予感とは別物なのだけど、身の危険を感じる、不可思議な気分だ。

「うん、そうだね。でも、曆お兄ちゃんの手は温かいな。お日様みたい」

千石の手は確かに冷たいぐらいだし、もしかしたら、冷え性なのかもしれない。

にしても、なかなか洒落た比喻表現をしてくれるな。

「きつと美味しいパンを作るよ」

「おい千石。お前が、言葉をつけ加えたことによって、綺麗な比喻表現から一転、微妙なラインのネタに変わっちゃまったじゃねえか！ 僕の手は『太陽の手』、パンの発酵に適した温度の手じゃねえよ！」

僕から顔を逸らして俯く千石。どうやら、身体を震わせながらも笑うのを我慢しているらしい。千石撫子の笑い上戸は健在のようだ。

あと念の為に、『太陽の手』についての説明が必要だろうか……今ひとつ知名度が判別つきにくいよな。

まあ軽く説明させて頂くと、パンを題材にした料理漫画にカテゴライズされ、『ミスター味っ子』を彷彿とさせる、食べた後の大げさでハイセンスなりアクションが売りの作品に登場する主人公が、この『太陽の手』の所有者なのである。

所有者と言っても、修行して身につけたとかではなく、元来の体質によるもので、こ

の手で捏ねたパン生地は、発酵が進みやすくなるという利点が生まれる。その為、美味しいパンを作るのに、好ましい手だと言えるのだ。

相変わらず、千石のネタのチョイスの傾向が読めない。咄嗟の応用力が試させるツツコミ役としては、由々しき事態だ。

「ねえ曆お兄ちゃん」

僕が今後の方針について検討していると、千石が窺うような声音で呼びかけてきた。

「ん？ どうした、千石？」

「曆お兄ちゃん、寒いのかなって思ってた……」

「いや、寒いといっても、これぐらいなら、何ともないよ」

「そんな事ないよ、曆お兄ちゃんは寒いはずだよ！」

「……そう、なのかな」

まあ、千石がそこまで断言するならそうなのだろう。僕は自分で思っているよりも寒そうにしていたのかもしれないな。

いらぬ心配をかけてしまったようだ。

「も、もし曆お兄ちゃんが寒いんだったら、撫子が温めてあげようか？」

「千石が？ それってどういうことだ？」

寒いギャグを言つて、相手を凍りつかせる事はできるけど、温めるとは一体？

心温まる談話でも聞かせてくれるのだろうか、などと考えていたら、

「こうすれば、撫子も暖かくなつて一石二鳥だよ」

そう言つて、僕の腕に抱きつく千石だった。

ああ、なるほど。腕を組むことによつて、暖が取れるのか……千石もどうやら寒かつたらしい。

至つて普通、奇を衒つたわけでもなく、なんとも合理的な方法だな。

ペンギンなんかも身を寄せ合つて、寒波を堪え忍ぶと言うし。

僕だけなら我慢すれば済む話だけど、千石が寒いのなら、そうするのも致し方ない。

歩きにくくはあるが、千石の好意を無下にする訳にもいかないしな。

「ま、この迷路をクリアして、外に出ればすぐに暑くなるんだろうからさ、それまで、お願いしようかな」

この迷路のクリアに要する、所要時間は約20分とパンフレットに書いてあつた。もう半分は進んだと思うし、あと10分もあればクリアできるだろう——

——そう思っていたのだけ……。

あれから、30分……ダンジョンに踏み入ってから、実に40分は経過しようとしている——あろうことか僕達は、“まだ”迷っていた。

同じ所をぐるぐる行ったり来たりで、一向に進んだ気配はなく、さ迷い続けている。蒼い弾丸だ。

コンセプトが迷路なのだから、特におかしい訳ではない、寧ろ、本来あるべき姿なのではあるが……まあ、なんと言うか……正確に言うと、“僕は”迷っていないのだ。奇しくも今の状況は、迷い牛に迷っていた、あの母の日と酷似していた。

僕が八九寺に——『迷い牛』についていったから迷っていたように、今の僕は、千石についていくから迷っている。

そんな感じだ。

理由というかその原因は——僕が敢えて口を挟まず、千石の意思の赴くままに進んでいるから。

今日の主役は千石なのだから、僕がしゃしゃり出る事もないと、身を引いていたのだ。言ってしまうと、子供でも挑戦出来るアトラクションなので、其処まで難解な迷路でもない。僕からすれば、ある程度歩き回ったところで、正解となるルートは導き出せていた。

しかし千石は……器用に正解となるその道だけを避け（神がかり的なルート選択

だった)、ともすれば、わざと正解の道に入らないように——迷う事に専念しているようにも感じられるほどだ。

いやいやいやいや、そんな事をするメリットが見つからないし、地図を読むのは女性の方が苦手だって言うしね。純粹に迷っているだけなんだろうけど。

ここまで迷ってくれば、製作者も本望だろう。

千石は終始上機嫌だし、迷路を楽しんでいるようだから別に構わないのだが……。

でもやはり相当寒いのか、千石がコアラのように抱きついて暖を取る姿を見ると（何故か蛇が巻き付いているようにも見える不思議！）、早く脱出した方がいいのではと思えてきた。

あ。また間違ったルートに入った。この先は袋小路があるだけだ……。

………果たして僕は、ゴールすることができるのだろうか？

なでこエンジェル～その3～

く006く

先に結果を言ってしまうえば、僕達は無事迷路から脱出することができた。いやいや……脱出できない訳がないのだ。

平均20分程度でクリアできる迷路を、1時間近くもさ迷い続けたことの方が、異例の事態と言えよう。

そうは言っても、僕がさりげなく千石を誘導して（流石に口を挟まずにはいられなかった）、迷路を抜け出したのだけど……あのまま千石に任せっきりにしていたら、果たして結果はどうなったことやら。

まあ、折角遊園地に来たのだから、一つのアトラクションに時間を割き過ぎるのは、得策じゃない。一日ではとても回りきれない広さだし、まだ試していないアトラクションに挑戦した方が有意義なはずだ。

そして今、僕と千石の二人は、少し遅い昼食を取っている最中である。時刻は1時半

をまわったところ。

僕達が食事をしている場所は、真つ白なテーブルと椅子が間隔をあけて配置された、飲食や休憩などを、来場客に提供するスペースで、ほぼ満席状態になっていた。

昨今では、飲食物の持込を禁止している遊園地も多いと聞くが、このエンジェルランドは持ち込み自由となっている。

テーブルの上——千石が持参してくれたバスケットの中には、サンドイッチの詰め合わせが入っており、形が崩れないように、一つ一つラップで包まれ、種類も豊富で具材も色とりどり、見た目にも食欲がそそられる出来栄えだった。

正確には四種類のサンドイッチがバスケットの中に、交互に見栄えよく詰められている。

飲み物は僕が自動販売機で紅茶（観光地価格と言うのだろうか……一本200円だった）を買ってきた。

それにしても、このサンドイッチ——もう既に一通り食べさせて貰ったのだが、味の方もまた格別だった。

「これは美味しいな。いくらでも食べれちゃうぜ」

語彙の少ない、僕のような料理初心者が、どれほど言葉を重ねたところで味の評価は、

美味しい、普通、拙いに振り分けられてしまうのだけど、そのどれもが、飛び切りの美味しさだった。

「曆お兄ちゃんに喜んで貰えてよかった……頑張った甲斐があったよ」

「頑張ったって、これ、もしかして千石が作ったのか？」

「え？ ………………うん………そう、だよ」

なぜかいつも以上に伏し目がちに——僕から視線を逸らして、歯切れ悪く、尻すぼみ気味に答える千石だった。

そんなに自分が作った事を伝えるのが恥ずかしかったのだろうか。相変わらず自己主張の少ない奴だな。

何にしても、これだけ、作れば大したものだ。正直、千石にこれほど料理の才能があったとは、僕も驚きを隠せない。

「実は僕ってさ、サンドイッチがすっげー好物なんだよな」

「そ、そうなの？」

「でもさ、料理とかするのは全然ダメだからさ。なあ、これって、どうやって作るもんなんだ？」

4種類あるサンドイッチの中から一つを掴み上げ、千石に尋ねる。

僕が今手に取っているサンドイッチは、一目見た感じでは、ゆで卵とマヨネーズを混

ぜ合わせただけのシンプルな『卵サンド』に見えるのだが、その実、ジャガイモや角切り野菜で混ぜ合わされている、手の込んだポテトサラダ風味の『ポテトサラダサンド』なのだ。

普段料理をしない僕だけど、サンドイッチはさつき宣言した通り、本当に好物なので、レシピを聞いて今度挑戦してもいい。割と本気で自分で作ってみたいと思つての質問だった。

「え？ つ、作り方？ えつと……野菜を水で洗つて……あとは、鍋でお湯を沸かしてから卵を入れて……タイマーが鳴ったら火を止めるんだよ！」

千石にしては珍しい、これで言い切つたとても言わんばかりのどや顔だ。

しかしこれでは、洗つただけの野菜と、ゆで卵が出来上がるだけである。

「……お、おう。それで？」

「うーんと……ゆで卵を茹でる時は、塩とお酢を入れると、殻が剥けやすくなるって……お母……本に書いてあつた」

「そつか、なかなか為になる知識だな」

更にゆで卵の作り方が補足された。

料理本片手に、調理するなんて、女の子らしくていいよな。多分僕だったら、目分量とか、感覚で作つちやうもん。

「まあ、もうゆで卵の事はいいとして、それから？」

「ふえっ？ まだ？ ……えくと、その………サンドイッチを箱に詰める時は、ゆつくり慎重にしないと形が崩れちゃう」

あれ？ 工程が大幅に省かれて、もう完成しちゃってるよ！

これじゃあまるで、千石が自分で作ったとは言っても、第三者の助力を得て——寧ろ、その第三者にほぼ全ての工程を一任し、千石はその人から出された指示を受けてのお手伝い程度の役割で、肝心の味付けや調理には全く携わってないかのように邪推してしまうじゃないか。

いやいや、僕の聞き方が、漠然としすぎていて、説明しにくかったに違いない。

今度は、ちゃんと順序をおいて聞いていこう。

次に手に取ったのはこれ。ベーコン・レタス・トマトが挟まれた、俗に言う『BLTサンド』。

シンプルでいて完成された味と言うのだろうか、それぞれの歯応えと風味が、三位一体ならぬ三味一体となって口の中に広がる、見事なできだった。

「これってパンの表面に、マヨネーズと一緒に何か塗ってあるだろ？ ちよつと辛いやつ」

これは知ってるけど、敢えて、段階を踏むために聞いただけの触りの質問だ。

「……………ワ……………ワサビかな？」

「なに!? この辛さはワサビだと!? 僕はてつきり、マスタードだと当たりを付けてたのに!」

「そうそう! マスタードだよ!」

「だ、だよな……………あ、さては僕を試しやがったな? 僕の反応をみて楽しむなんて人が悪いぞ、千石」

僕も素人なりに、これぐらいなら解るのだ。くそ、危うく千石のお茶目な悪戯に引っかけりそうになっちまったぜ。しかし千石もなかなか油断なら無いやつだな。

「じゃあさ、マスタードの他にもピリツとくる辛いの入ってるだろ。この黒い粒はなんだ?」

本題はこつち。こちらも大よその見当はついているのだけど、今ひとつ確信が持てず、あやふやな感じで気になっていたのだ。

千石が僕の手の中のサンドイッチを見つめ、躊躇いがちに口を開く。

「……………スイカの種……………かな」

「マジで! そんなもん入れるのかよ!? そういや、ひまわりの種とかだつて食べれるもん。へ〜こんな使い方があって知らなかったぜ」

「スイカバーの種も食べれるしね」

「あれはチョコレートだろ。面白いこという奴だな。ま、冗談はさておき、本当はなんなんだ？」

千石のネタフリにしては、今回は実にわかりやすいボケである。これなら、ノリツツコミつもし易いつてもんだ。

しかし、僕のノリツツコミにはさして興味を示してくれず、なぜかすごい真顔で考え込んでる。

「……なら………黒ゴマ………じゃないかな？」

「ふ〜ん、黒ゴマか」

なぜ疑問系なのかは釈然としないけど、ゴマって辛味もあるんだな。そう言えば黒ゴマの坦々麺とか辛かった気がする。でもあれってゴマ本体が辛いのか？ ん〜む、やっぱり料理に対する知識は乏しいようだ。

個人的には黒ゴマの粗引きだと踏んでいたのだけど、僕の舌もあてにならないな。

「じゃあ今度は、こっちの。多分野菜だと思うけど、赤と黄色のカラフルなちよつと甘い、輪っか状のこれってなんなんだ？」

僕の知識がないせいで材料が判別できないけど、赤・黄の色鮮やかな野菜で、味はフ

フルーツみたいに甘かった（酢とレモン汁で漬け込んでいたのか、爽やかな酸味も感じた）。

確かピーマンの一種で、レプリカみたいな名前だったはずんだけど……喉の先まで出掛かっているんだけどなんだったかな。

「……曆お兄ちゃん。隠し味は隠してこそなんだから……おいそれと聞いちゃ駄目なんだよ」

「え？ 隠し味……ああ、それは無粋な真似をしちゃったな、ごめん千石」

と、口では謝りつつ、胸中には疑問符が浮かんでいた。それって寧ろさっきの、マスタートードのような調味料なんかに適応されるべき言葉じゃないのだろうか？ だってこれ、もろに見えてるし……。隠せてねえ。

いや、もしかしたら、千石が言いたいのはこういうことか？

気難しい頑固主人の経営するラーメン屋ではないが、秘伝の味をおいそれと教える訳にはいかないという料理人としての矜持——いわゆる企業秘密みたいなものなんだろう。

「……なら仕方が無いな。千石にサンドイッチの作り方を直に手ほどきして貰おうかも考えてただけ……それは甘かったな」

「えっ！ それって曆お兄ちゃんの家で一緒に作るってことかな？」

「ん？ ああ、でも無理強いできないし。悪いな気にしないでくれ」
「待って曆お兄ちゃん！」

千石が慌てたように言う。

「…………えくと…………どうしよ…………でも……………な、撫子が手取り足取り教えてあげるよ」
「いいのか？ なんか悪いな、無理やりつき合せちゃうみたいで」

また気を遣わせちゃったな。千石には借りをつくつてばかりだ。

「こ、曆お兄ちゃんは、どのサンドイッチが好きだった？」

「ん？ 全部美味かったぜ。全部好きだ」

「……………全部じゃ覚えきれない」

千石が、ボソリと小さく声を漏らす。

「覚えきれないって何がだ？」

「ううん。こつちの話。でも強いてあげれば、どれかな？」

「うくん……………難しいな……………まあ強いてあげるならこのカツサンドかな」

4種類あったサンドイッチの最後の一つが、この『カツサンド』だ。

カツはつけダレに一度くぐらせたのか、甘辛く、千切りのキャベツとの相性が絶妙で、市販のマヨネーズとは違った、口当たり滑らかで酸味の効いた、手作りと思われるマヨネーズソースがこれまた最高だった。

うん、これが僕的に一番の好みだ。やっぱり肉ががつり入っているのはいいよな。

「手が込んで、少し難しいそうだけど」

「うん。難しそうだから、それ以外で」

「なぜっ!? ……ああ、そうか。僕が作るにはまだ荷が重いつてことか。教えを請う立場だしな。初心者でもいけるやつがいいよな」

「うん、うん。簡単な方がいいよ」

激しく顔を上下させる千石。そこまで力強く頷かなくてもいいだろうに……。

「なら、このBLTサンドなら、切って挟むだけだし、僕でもどうにかなりそうかな」

「うん、それなら………作れそう」

鬼気迫る表情で、BLTサンドを見つめる千石である。だけど……それなら作れそうって、そんなに僕の料理の腕が信用できないのだろうか。まあ信用される要素を提示した事なんてないけど。

「でも料理ができる女の子っていいよな」

僕の中では、女の子を評価する時のパロメーターとして、お料理スキルは結構な加点ポイントなのだ。

料理を作るのが上手いという理由で、神原のお祖母ちゃんと結婚したいと思ったこと

がある男——僕こと、阿良々木暦である。

いや、神原のお祖母ちゃん料理の美味しさといったら筆舌に尽くし難く、僕の知り得る中でも最高クラス、料理の鉄人クラスの腕前と言つてもいい（無論、料理の鉄人が作つた料理を食したことなどない）。

「そ、そうなんだ。じゃあ、撫子は将来コックさんになるよ。暦お兄ちゃんのご飯を毎日作つてあげる」

「じゃあつてなんだよ。じゃあつて……いや、そんな生き急ぐな千石。もつと自分の将来は大切にしろ」

しかも毎日つて……千石はいつたいてい何を考えているのだろうか？

専属のシェフにでもなるつもりか？ 僕にそんな人を雇えるほど裕福な未来が待っているとは思えないな。

「でも一期一会つていうし」

「いや、今この時、その一瞬を生きろつて意味じゃないだろ。そんな刹那的に物事を判断するな」

「でも、撫子。特にこれといつてなりたいたいモノないよ」

「ま、中学生なんだし、焦ることないだろ。僕も全然将来のことなんか想像できないし。とりあえず大学にいつてからだな」

いや、正確には大学に合格してからののだが。ここは千石がいる手前、受かるのが前提として話を進めさせて貰う。しかしながら、受験生がなんで遊園地に来てるんだろうな。うーん、不思議なものだ。

「あ、でも撫子。将来は暦お兄ちゃんのお嫁さんになりたいかな」

「そう言えば、そんな嬉しいこと前も言ってくれてたよな」

前に千石の家に遊びにいった時に、リップサービスのようなものだが、そんな事を言ってくれたのだ。

「うん。ずっと前から言ってるよ。小学生の頃から変わらない、撫子の目標だから」

「……………」

僕の感覚の『前』とは、つい最近の、千石宅にお邪魔した時の事なだけだな……………

千石と僕の間には、決定的な感覚のズレがあるようだ。

純情な中学生の女の子が、僕のような冴えない男の事を理想の男子像として語るの
は、お世辞としても余りよろしいことではない気がするけど、まさか千石も本気ではあ
るまい。

千石の言葉を鵜呑みにすれば、小学生の頃から僕に想いを寄せていて、その時から変
わらず僕と結婚するのを目標としてきたことになる。

あり得んあり得ん。可能性皆無というか、自惚れ過ぎである。自意識過剰もいいとこ

だ。

しかし『目標』って表現は妙に生々しいと言うか、やけに現実的な言い方だよな。普通、『夢』とかもつと漠然的な表現をするものじゃないのか？

まあ今回もリップサービスみたいなものだから特に深い意味はないだろうし、そこまで深く考える必要も無いのだろうけど。

なでこエンジェルくその4く

く007く

昼ごはんも食べ終わり、お腹も満たされた僕達は、再度遊園地を回り始めた。

数時間ごとに定期開催される、巨大なセットの中で行われる、アクション満載の冒険ショーを観覧したり、まだ乗っていなかった、違う種類のジェットコースターに挑戦したり、他にもコーヒーカーップやメリーゴーランド、ゲームコーナーにて記念のプリクラ撮影などなど、他にも盛り沢山、フリーパスの利点を活かして、十二分に遊園地を満喫したのだった。

そう言えば、園内の移動中は、手を繋いでいるのが常となっていた。『迷宮ダンジョン』だけの一時的な処置だと思っていたのだけど、迷路をクリアした後も、千石は一向に手を離さなかったのだ。

しかも、繋ぎ方は俗に言う『恋人つなぎ』。合わせた手を指一本分ずつずらして指を絡めるアレ。

最初のうちは、軽く手を繋いでいるだけだったのだが、何度か手を繋ぎ直している内に、いつの間にかこの繋ぎ方になっていたのである。

千石は内気で人見知りの激しい子だから、不特定多数の人がひしめき合う遊園地を、単身で歩くのは怖かったのだろう。もしくは、念には念を入れて、迷子にならない為の対策をしているだけかもしれない。

そして時間は流れて、現時刻は午後4時を過ぎたところ。

僕たちは服を乾かすのと休憩も兼ね、フードコーナーにてソフトクリームでも買って、ひと息つこうとしていた。

ちなみに、なぜ服を乾かす必要があるのかと言うと、つい先程、急流すべりに乗ってきたからだ。

一応カッパの貸し出しもあったので千石に勧めてみたのだけど、『暦お兄ちゃん駄目だよ。郷に入っては郷に従えっていうんだから』と窘められてしまった。

当然その結果、急降下に伴う水飛沫を防ぐ手段もなく、服が濡れてしまったという訳である。

とは言え、それが急流すべりにおける醍醐味なのだから、不快感などはなく、寧ろ清々しい気分だった。

まあそれは僕個人の感想で、千石は服が濡れてしまった事により、ブラが透けて見えていると大慌てだったけど。その時の慌てふためく千石の一場面を抜粋してみよう。

『ああ！ 撫子の服が濡れて透けちゃってるよ』

『はわわわわ、ブラまで見えちゃって恥ずかしいよう、曆お兄ちゃん』

とまあこんな感じで、狼狽していたのだが、妙にオーバリアクション（アメリカの通販番組みたいな口調だった）というか、僕に濡れた服をアピールするように言うのだった。

それはまるで、僕に見せたいがために、わざわざ濡れるように仕向けたような………いやいや、急流すべりで濡れてしまうのは当たり前のことだし、千石が、身体を捻って自分から濡れにいったように見えたのも、きつと目の錯覚だ。

話を戻して——僕と千石は、お目当てのソフトクリームの味が記されたメニュー表を見据え、商品を選んでいた。

「千石、決まったか？」

「ん〜と……撫子はチョコがいいかな」

僕が食べたい味を尋ねると、少し逡巡してから、千石はそう答えた。

「千石はチョコが好きなのか、やっぱり女の子って感じだな」

「うん。つつい家でもあったら食べちゃう。一番、チョコが好き」

ほんと女の子ってチョコレートが好きだよな。僕の母親も大好きで、冷蔵庫の中には常にチョコレートが入っている。

フアイヤースターズの二人も例に漏れず、チョコに目がないようだが、ダイエットの宿敵だからとなるべく視界に入れないようにしてるらしい。

だけど、何だかんだと理由をつけて食している現場を僕は目撃している。つうか、火憐の運動量を鑑みれば、ダイエットする必要なんかないだろうに。

月火は………うん、まあ頑張れ！ お兄ちゃんは応援しているぞ！

と、有らぬ誤解を誘発させる印象操作を行っておいてなんだけど、別に太っている訳じゃないよ。なんかプニプニしてるだけ。触り心地はなんかテンピュールみたい。

「じゃ、僕もチョコにしようかな。すいません。チョコふた——」

「ちよつと待つて暦お兄ちゃん！」

営業スマイルで待ち構える店員（心の中ではさつきと頼めよと思ってるに違いない。僕の被害妄想だろうけど）に注文しようとしたら、千石に遮られてしまった。

「どうした千石？」

「ごめんなさい。撫子、やっぱりバナラがいいな」

「……………じゃあ、バナラとチョコお願いします」

一番好きなのにしたらしいのにと胸中で思いながらも、手早く注文を済ませる。

いつもの事ではあるが、直前になつて注文を変更したぐらいで謝らなくてもいいだろうに、堅苦しい奴である。しかし、そういう丁寧で慎み深いところが、千石の美点でもあるのだから、これでいいのだろう。

そんなこんなで、店員からソフトクリームをそれぞれ受け取り、うまい具合に空いていた近くのベンチに腰掛ける。

三人掛けのベンチでスペースにゆとりもあるのだけど、千石は僕の横にびつたりと詰めて座った。隙間なく互いの腕同士が触れ合つて——密着である。

もしかしたら千石は、三人掛けのベンチを二人だけで占領するのはよくないと思つたのかもしれない。詰めて座れば、もう一組ぐらい座れそうだし。千石はこういつた心遣いの出来る優しい子なのだ。

まあしかし、幾ら混雑気味の遊園地で、空席を探している人がいたとしても、相席を要求してくる輩がいるとは思えないけど。

「曆お兄ちゃん、いただきます」

隣に座った千石が、行儀よく、食事の前のお決まりの口上を述べる。

『曆お兄ちゃん』と名前を呼んでから言ったのは、奢って貰ったことへの感謝を示しただけであつて、僕を食べたいとかカニバリスムの意味合いではない。

早速、二人寄り添ってソフトクリームを食べ始める。

「美味しいな」

食べ慣れた味だけど、やはり美味だった。やはりスーパーなんかで買う普通のアイスよりも断然、口溶けや舌触りがいいし、チョコの甘さが上品だ。少し僕には甘すぎるくらいはあるけど。

「うん、冷たくて美味しいね。あ、撫子、チョコが好きなんだ、ちよつと、かえっこしちゃ駄目かな？」

「いや……え？ ぜんぜんかまわないけど……」

千石の申し出に疑問を覚えつつも、了承する。

そりや一番好きって言つてたもんな……ならなんで、わざわざバナラ味に変更したのだろう……。

偶には違う味が食べたくなくて、別のを頼んでみたものの、やっぱり食べてみたら

つもの味がよかった、みたいなどこかな。

しかし、これぐらいの歳の女の子って間接キスとか、人が口につけたものに拒否反応を示したりするものだけど、やっぱり千石はそんな細かいこと気にしないんだな。

ああ、そう言えば、以前千石の家にお邪魔した時に、一つのコップで回し飲みしたっけ。

僕と千石は兄妹みたいなものだから気にしない的な事を、千石自身が言ってくれていたらじゃないか。

ここまで、信頼を寄せて貰えて、僕としても嬉しい限りだ。

「じゃ、じゃあ……まずは撫子のから。はい、あくん」

「……………」

ちよ、ちよつと待て！ いやいやいやいやいや、コーンを手で持てるタイプのヤツだから、普通に交換すればいいんじゃないのか!?

なんで、こんなイベントが発生しているんだ!?

「ど、どうしたのかな?」

困惑する僕を見かねて、千石が問いかけてくる。

って仕掛けた張本人が、恥ずかしさの所為か顔が真っ赤だった。慣れないことしてん

じゃねえよ。

「せ、千石。別に自分で食べれるからさ。普通に渡してくれれば大丈夫だぜ」
「ううん。こんな事、曆お兄ちゃんの手を煩わせることもないよ」

かなり説明し難いのだが、たつた今の千石の発言のニュアンスはこんな感じ——ボス（大敵）に仕える幹部が、格下に位置付けられた主人公を倒しに行く時に使用する『この程度の相手、○○様のお手を煩わせる必要などございません』的な。

○○には、『フリーザ』と固有名詞を入れて、この台詞を言ってるのが『ドドリアさん』や『ザーボンさん』なんかだと思えば、イメージし易いかもしれない。

然るに、そんな口調で言われても挨拶に困る。

だが、これでいて千石も頑固な一面もあるからな。世界初と思われる消去法主義者でもあるし、千石の意思は揺るがなさそう。これはもう千石の中で決定事項なのだろう。

千石から受ける視線から、拒否を許さない圧力を感じる気がするし（気がするだけだ）。ならばこちらから折れるしかない。

このイベント事態は、既に彼女と——戦場ヶ原ひたぎと体験済みではあるが、あの時

は、トキメキやドキドキ感は皆無で寧ろ、恐怖心すら抱いたからな。あの戦場ヶ原の無表情は実に怖かった。軽いトラウマである。

それと違つて千石は、僕の夢見た『照れくさそうなのはにかみ顔』に限りなく近い、恥じ入つた赤ら顔だ。

だからと言つて、僕と千石は兄妹みたいなものだから、変に意識する必要などないのだけど。つてあれ。そもそも兄妹でこんなイベントが発生するものなのか？

仮にもし、火憐ちゃんや月火ちゃんに、こんなことされたらどうだろう……？

……………（想像中）。

うわ、気持ち悪つ！ 間違ひなく一喝の元断固拒否するな。差し出された手を叩き落とすね、絶対。だつて多少仲良くなつたとは言え、僕達兄妹は超仲悪いもん。

まあその点、千石は妹とは言つても『妹的存在』なのだから、嫌悪感もなく、ただ純粹に可愛いだけだし、断る要素など見当たらない。

「……………まあ、そこまで言うのなら……………あ、あゝん」

戸惑いがちに口を開けると、口元にバナラソフトを近づけて食べさせてくれる。バナラの風味とクリームの冷たさが口の中で広がって、すぐに溶けきってしまう。チョコよりも甘さ控えめで、僕的にはこちが好みだ。

味の評価は兎も角として……中学生の女の子に、ソフトクリームを食べさせて貰っている図（しかも彼女自身の食べかけ）ってのは、果たして倫理的にありなのだろうか……。

しかし……なんと言うかまあ、これって、思った以上にすっげ〜ドキドキするんだな。この相手が千石じゃなくて八九寺だったら、間違いなく襲いかかっていると断言でき。まあ八九寺の場合は無条件で強襲するんだけどね。

でも千石に対しては、僕は誠実なお兄ちゃんに在らねばならないというか、八九寺と同じ風に接したら間違いなくドン引きされる。

暦お兄ちゃんが拘留所に収容されてしまう。

八九寺に関しては、法律適応外ということで、人権は認められていないから問題ない（けど問題発言だ）！

僕は見境なく襲うケダモノではなく、理性を有した分別のある人間だから、していいこと、しちやいけない事の判断はちゃんとついている——人間誰しも、相手と状況に応じて違うペルソナを使い分けるもの。

「さ、暦お兄ちゃん。美味しい？」

赤面した千石が尋ねてくる。

更に赤みが増して、ゆで蛸みたいだ。しかし、僕の顔も千石と似たようなものかもしれない。なんかアイス食べてるのに、身体の中あつついもん。

「お、おう。バナナも美味しいな」

「つ、次は撫子の番、だね」

当然のことながら流利的に、僕もすることになるのか……。

本来のイベント的には、作ってきたお弁当なんかを女の子の方から一方的に食べさせて貰えるだけのイベントなのだけど、今回はかえっこだもん……。どうするよこれ。なんだ、このシチュエーションは！ ちよつとこれはまずくないか？

火憐ちゃんとの「歯の磨き合いっこ」ぐらいに……ヤバイものを感じる。何がヤバイのかは見当もつかないけど、それだけはわかる。

しかし、わかっているだけで、歯止めが掛かったという意味ではない。だって僕の頭の中は、止められない止められない、かっぱえびせん状態だし！

うわ。もう思考回路がショートして、なんだか意味不明で支離滅裂で解釈不能。死なば諸共、後は野となれ山となれ。

「よし。……じゃあいくぞ、ほら、あ〜ん」

「あ〜ん」

僕の差し出したチョコソフトを、潤いのある小さな唇が受け止める。舌先を小刻みに動かしてアイス舐める姿は、まるで仔犬が水を飲むように愛らしい。

しかも、僕と千石の距離は先程も述べた通り、ほぼ密着状態。まつ毛の本数だって数えれてしまいそうな至近距離で、千石の顔が必要以上によく見える。きめ細かい瑞々しい肌にはシミ一つない。

千石の可愛らしさは、周知の事実ではあるが、その可愛さが三割増し……いや五割増しだ！

僕自身の手で食べさせてあげているという状況が引き起こす、類を見ない羞恥心との相乗効果と相俟って、もういとおしくて堪らない！ 気持ちが高ぶるのも致し方ないというものだろう。お持ち帰りしてえ！

「ど……どうだ、千石。美味しいか？」

うわ、変に緊張しちやって、どもっちゃったよ。千石は僕にとって『妹的存在』の大切な女の子なのに、僕は一体何を意識しているのだろうか。

これでは『お兄ちゃん』失格である。いや人間失格かもしれない。もうあれだ……『生まれて、すいません』とか言ってみたり。

僕は笑えなかつた。

「うん。美味しい……やっぱり撫子、チヨコの方が好きかな」

「じゃあ、このまま、全部かえっこしちまうか？ チヨコは少し甘すぎるから、僕もバナナのほうがいいし」

「いいの？ じゃあそうして貰おうかな」

二人の思惑が一致したので、僕は自分の持つチヨコソフトを千石に差し出し、千石からも同様に受け取ろうとしたのだが、千石は微動だにしなかつた。

動きのない千石を怪訝に思っていると、視線だけを動かして僕を見つめる。

「な、撫子が食べさせてあげるよ。だ、だから、暦お兄ちゃんも、撫子に、ね」

こんなつぶらな瞳で凝視されて、オマケに『ね』なんてお願いするように同調を求められて、断るお兄ちゃんがいるだろうか!? いるわけがない！ いたとしたら、その人間性を疑うね！ 『お前の血は何色だ！』 って詰め寄るね！ 恫喝するね！

「お、おう。じゃあ……そうしようか」

まあ、そんな風に心中では荒く息巻いているのだけど、表に出す態度は主体性に欠ける受動の構えなのが阿良々木暦クオリティー。相変わらずのチキン阿良々木である。

「よし、まずは——」

「あ、暦お兄ちゃん。口元にクリームが付いてる」

僕が声を発しようとしたところ、千石が左頬辺りを指差しながら指摘してくれる。子供丸出しの、情けない醜態を演じてしまった。

すぐに手で拭き取ろうとしたのだが、僕が動くよりも先に千石の腕が伸びてきた。

僕の唇の端に千石のか細い指先が触れ、繊細な所作でもってクリームを拭い去り——それをそのまま、ごく自然な動作で自分の口へ運ぶ。

「綺麗になったよ。暦お兄ちゃん」

そう言つて微笑する千石は、妙に艶かしく、もう心臓を鷲掴みにされたみたいにとキツとした。

いやはや、つくづく女の子に対する免疫がないと思ひ知らされるな。中学生女子の何気無い行動に、こうもどぎまぎしてしまうなんて、僕ってかなり初心なんじゃないのか。

「じゃ……じゃあ、改めて千石。ほら、あくん」

「うん、あくん」

コクリと小さく頷いて、千石は小さな口を目一杯大きく開けて、舐めるのではなく齧る感じで、チョコソフトを口に入れる。

「は、早く食べちゃわないと、溶けてきてるから……」

大口を開けた事をはしたないと思つたのか、頬を赤らめながら釈明する千石が可愛いこと可愛いこと。なんだこの可愛い小動物は！ はにかんで僕の視線から逃れるように俯いて、可愛いつたらない！

あれ……千石に対する描写がさつきから『可愛い』だけしか言つてないような……しかし可愛いものを可愛い以外、どう評価すればいいのかつて話だ。

自身のポギヤブラリーの貧困さを嘆きたいところではあるが、『可愛いは正義』とも言われてるし、ここは可愛いで押し通そう。

千石は可愛いなあ、可愛いなあ。もう八九寺なんか旧時代の遺物だ。時代遅れである。だつてアイツ全然恥じらいとかもたないんだもんなあ、頬を染めてる姿なんて見たことない。

まあ僕は懐古主義者でもあるわけだし、レトロなモノにも愛着はあるので、八九寺を見捨てたりなんかしないけど。

「じゃあ、次は曆お兄ちゃんの番だね。はい、あ〜ん」

再度千石が僕に食べさせてくれる。僕が一口齧ると、次は僕から千石に。交互に。順番に。間断なく。

交代制で——手に持ったコーンを食べきるまで続ける僕達だった。

「美味しかったね。暦お兄ちゃん」

「そうだな。なんかいつも以上に美味しかった気がするよ」

ほんと、河川敷でするバーベキューが普通に家で食べるより、断然美味しく感じるみたいだに、味が別物だった。

いや〜不思議ものだ。

人に食べさせてもらうだけで、何でも味が変化するものか。

あれ……………ふと思えば、なんで僕、千石とこんな恋人同士がやるラブライブメントに突入し、しかもお互いで食べさせ合うなんていう重度の馬鹿っぷルみたいなことしてんだ？ 始めは味見程度のかえっこだったはずなのに、気付けば完遂してるし！

「どうしたの、暦お兄ちゃん？ 浮かない顔して」

「ん？ いや、何でもない……………」

いや、何でもあるわけなのだが……………なんか途轍もない過ちを犯してしまったよう

な気がしてならない。

僕はただ、千石の何気無い要求に応えてあげただけなのに……。

ただそれだけのはずに……。

別に如何わしい行為に及んだという訳でもないのに……。

この言い知れない、後ろめたいような背徳感なんなのだろうか？

なでこエンジェル～その5～

（008）

「千石、怖くないか？」

「うん、大丈夫。全然怖くないよ」

対面に座った千石の言葉は力強かった。どう見ても恐怖を抱いているようには見えない——寧ろ、表情は嬉々としている。って事は、怖がっているのは僕だけか。

考えてもみれば、千石ってジェットコースターとかも心底楽しんでたようだし、これぐらいへっちやらだよな……。

「そっか……なら、いいんだけどさ……」

現状を説明すると、僕と千石は観覧車に乗ってるのだった。

これだけでは、僕が観覧車に乗って怖がつている、高所恐怖症の情けない男子高校生になってしまうので釈明させて頂くが、現在進行形でこの観覧車が揺れているのだ。ユラユラではなく、ガタガタ。

鉄が擦れる音が、怖い何のつて！ 断続的に聞こえてくる鉄の軋む音に、否応なく全身が総毛立つ。

原因は、整備不良とか観覧車の不具合ではなく、強風に煽られているから。上空で不安定に揺れ動くゴンドラは恐怖以外の何物でもない。

内心では震え慄いているのだけど——千石が居る手前、表情や言動にはおくびにも出さず、平静を装っている。

地上がどんどん遠のいていく。見下ろせば、人の姿が豆粒のよう。『見ろ！ 人がゴミのようだ！』なんて心の中でたまいつつ、口にしたのは至極まともな感想だった。

「にしても、すごい景色だな」

窓の向こう側には緑豊かな山並みが広がっていた。勿論、エンジェルランドの全貌を見渡すことも出来る。

突風に煽られ揺れ動くゴンドラのせいで、内心では、そこまで景色を堪能しているわけではなく、軽微の現実逃避といって差し支えない。

お喋りに興じれば、幾分気が紛れそうだという、身も蓋もない考えでもあった。

「うん、いい景色だね。人が蟻さんみたいに見える」

園内を移動する人の姿が、巣の中を縦横無尽に行き来する蟻の姿に見えたのか。なか

なか発想が柔軟で、僕との感性の違いがよくわかる。

今日の千石は饒舌とは言えないまでも、いつもに比べれば口数が多く、よく自分から喋ってくれる。自分の殻に閉じこもっているよりは、断然いい傾向だ。

「曆お兄ちゃんのアホ毛がもう一本あったら、蟻さんの触覚みたいでよかったのに」「さてさて。確かにアニメでは、僕の頭髮の一部が意思表示までする鬼太郎もビツクリの摩訶不思議な物体Xとなっていたが、実際にはあんなセンサーシヨナルなもんはない！ あんなアホ毛は架空のものだ！ フイクシヨンだ！」

なんで僕の周りの人間は、僕を蟻にしたがるんだろう。戦場ヶ原なんて、蟻が好き過ぎて、蟻の巣キツトなんて買ってやがった（蟻の名前はアリキ）。

しかも、蟻が如何に素晴らしい生命体か、僕と逐一比較しながら御高説下さった。どちらが上で、どちらが下の立場かは言う必要もない。

話が前後してしまっただが、この観覧車が本日最後のアトラクションとなっている。帰宅時間を考慮すると、閉園時間までいることは難しかったので、僕の判断でそう決めたのだ。

僕がその旨を伝えると、千石は少々不本意そうにはあるが、頷いてくれた（本心としては、もつと遊園地で遊んでいたいのだろう）。

千石の気持ちに応えてやりたいのは山々だったけど、あまり遅くまで拘束するのもよろしくない。

一応千石は、親に帰りが遅くなると伝えてはいるが、それでも限度がある。ここは我慢してもらうしかなかった。

そんな訳で、最後をめるアトラクションとして千石がチョイスしたのが、やはり言うべきか、この遊園地で尤も人気の高い大観覧車。

エンジェルランドの看板を背負っているといっても過言でなく、この遊園地自体のパンフレットや市販の情報誌なんかに、一押しのアトラクションとして紹介されている。

パンフレットによると、最高到達点が120Mにも達するという、かなり大型なもので、『天国に一番近い遊園地』の謳い文句通り、高さに関しては徹底的に力を入れているようである。

一周にようする時間は約20分。エアコン完備で夏は涼しく、冬は暖かい。またゴンドラ内にはスピーカーが設置されており、音楽を聴きながら景色を遊覧できる。

無音の中で話すよりも、多少BGMが流れていた方が、心も落ち着き話が弾むものだ（今は強風の為、幾分効果が薄れているのは否めない）。雰囲気作りや、沈黙を緩和するのに適した、心憎い配慮である。

しばし、観覧車から見える景色を語りつつ、折々に世間話をしていた（主に漫画についての議論）。

そうして、観覧車に乗って五分ほどが経過して——丁度、僕達の乗るゴンドラが、観覧車の中腹辺りまで上ってきたところで唐突に千石が躊躇いがちに口を開いた。

「ねえ……曆お兄ちゃん。少しの間、目を瞑っていてほしいな」

「……………え？」

千石の背後から照らす夕焼けの赤さとはまた別の——自身の発汗による赤ら顔。

ここで熱でもあるんだろうか、なんてお門違いな間違いする奴なんていないだろう。

だって、これはどう考えても“あれ”だよな。

観覧車の中で二人きり。男と女。千石の恥ずかしそうな顔と、極めつけの——このいかにもな常套句。

そこから導き出される答えは——接吻。

いやいや、別にこんな古風な言い回しをする必要などないのだけど、余りにも予想外

な展開に、僕は驚き戸惑っているのである。

「……ちよ、ちよつと待つてくれ千石！」

ただ、現状は理解できたとしても、千石の真意が分からない。大人の女性に憧れた、夢見る少女的な感覚なのだろうか？

年上の男と付き合えば——交際した男女の愛の営みを経験すれば、自身も大人の仲間入りが出来るなんていう、勘違いも甚だしい思い込み。

僕は法規上ではまだ二十歳に満たない子供だけど、千石から見れば十分に大人の区分けにされるはずだ。だが、そういうものは往々にして時が経過すれば、後悔へと変ずるものだ。

若気の至り。千石に早まった真似をさせるわけにはいかない。

「な、なあ千石……千石にはまだ早いんじゃないのか？」

僕の言葉に千石が首を振る。

「そんなことないよ、もつとちよちよちやい子だつて……」

「でもさ——」

最近の子は、気が早いんだな。千石より年下となると、下手をすれば小学生つてことになる。しかし、ここは模範となる解答を提示してやらねばなるまい。

「千石の気持ちに分からないでもないけど、後々に後悔することになるぞ。冷静になつて後で思い返してみれば——」

「そんな事ないよ。撫子……ずつと我慢してたんだよ」

僕の口上を遮り、切実に訴えかけるように——千石の嘆願は僕の心に楔となつて打ち付けられた。

畳み掛けるように、更に千石が言葉を紡ぐ。

「それに、チャンスは今しかない……よ」

千石のような恥ずかしがり屋な子にとっては、人目に晒されるのは、何としても避けたい重要事項なのだろう。

この観覧車という衆目の視線から隔離された空間は、千石にとって待ち望んでいた場所というわけだ。

「……ねえ、曆お兄ちゃん」

力強く、それでいて酷く脆いような二律背反とした不思議な声音。明確な言葉ではないのだけど、千石の呼びかけの意味は催促だ。もしそのまま言葉が続いていたら『はやく目を瞑って』だろうか。

「でも……」

言葉を濁す僕。千石の想いを無下にすることは憚られるし、今日は千石のお願いを訊いてやるつもりでここまで来たのだ。

僕の心が天秤のように揺れ動く。正に今のゴンドラと同じように。

「暦お兄ちゃん」

更に千石が言葉を重ねる。

結局——千石に押し切られる形で、僕は促されるままに目を閉じてしまった。

自分の意志が薄弱で、状況に流される。一時の感情に左右される。強い想いに簡単に淘汰されてしまう。

薄くて弱い阿良々木暦——そう、僕を揶揄した人物の顔が浮かぶ。

正しく……その通りである。

く 009 く

全くの暗闇。目を閉じているので当たり前なのだが、視覚が閉ざされた分だけ、聴覚がより鋭敏になっていた。

僅かに聞こえてくる物音。ゴソゴソと何かを漁るような………何かを探している

?

吸血鬼の名残として人間の能力が底上げされている僕なので、聴覚も例外ではない。確実にとはいかないまでも、大まかに千石の動きを推測することができた。この閉じられた空間ならば、普通の人間だって十分聞き取れる範囲内だろうか。

「曆お兄ちゃん……もう、いいよ」

と、千石は——僕に“何も”しないまま、そう言った。

あれ？ おかしいな。僕、千石にキスされてないぞ？

心中で訝しがりつつ、ゆっくりと目蓋を開く。

まず、最初に目に飛び込んできたのは、逆光となつて降り注ぐ、夕焼けの赤い光。

そして、窓枠の下には『天使』がいた。黒髪が其処にいた。

より明確に言い表すのならば、天使の姿をした千石である。

別に純白の羽衣を纏っているわけでもないし、背中から白い羽が生えているわけでもない。千石の衣服や、身体に変化があったわけではない。

目を瞑つてから開けるまでの僅かの変貌を遂げたのは、千石の頭部と、頭の上だ。彼女の頭上に、天使の光輪が浮いている。しかも。いつのまにか……いやいや目を閉

じている間にだが、麦わら帽子は膝の上に置かれており、その代わりに——千石のトリードマークの目を隠す前髪がかきあげられ、おでことおめめが頭わになつていた。

「ど……………どうかかな？」

妙に甲高い緊張した声で千石が僕に問う。

「……………ん？ あ、ああ。似合つてるぞ。思わず見蕩れるぐらいによく似合つてる。天使がいるのかと思つちまつたぜ。うん、本物の天使みたいだ」

在り来りな表現。しかしこれが一番適した言葉とも言える。

天使。『なでこエンジェル』だ。

これはお世辞でもなんでもなしに、本心からの言葉だった。

後ろから射す光が後光のように千石を照らしている。それが、より千石の姿を幻想的に浮かび上がらせていた。

改めて千石の可愛らしさを実感する。

よくよく観察してみると、その天使の輪っかは、このエンジェルランドで発売されている作り物。

そういえば、園内で装着している人の姿を結構見ていたな。大人子供問わず、つけていた気がする。セットで小さな羽根なんかも販売していたはずだ。

本来は、頭に載せるのを目的としたものなので、髪を掻き上げる用途はないのだが、千石は、それをカチューシャの役割もかねて装着しているようだ。

いつの間にそんな物を購入していたのだろうかと思つたが、千石がお花を摘みに言っている時なんかは離れていたし、きっとその時にでも買ったのかな。そう見当を付ける。

つうか僕、めちやくちや恥ずかしい勘違いしてたな。何がキスされるだよ！

こういう自惚れをしないように極力気をつけてきたつもりでいたけど、やっちゃまった。もうソードマスターヤマトの担当さんばりに、やっちゃったぜ☆

なんで千石が僕にキスをしようというんだ。僕の頭は欠陥製品で御めでたい頭だな……滑稽極まりない。

千石が僕を慕ってくれているのは、『お兄ちゃん』としてであり、一人の男としてみているわけではないのに。

しかしながら……千石に気付かれずに済んだのは不幸中の幸いだった。ふう……命拾いしたな……。

僕がほつと胸を撫で下ろしていると、徐に千石が立ち上がった。

揺れ動くゴンドラの中で立つと危険なので、声を掛けようとするも、千石はすぐに備え付けのベンチシートに腰を下ろした——なぜか僕の隣に。ソフトクリームを食べた時みたいに密着している。

「せ、千石？」

「あ……あつちの景色も……見てみたかったから」

「そうか、悪いな。僕、そういつた気遣いに疎くてさ。じゃ、僕も反対側の景色をみるとしようかな」

いろんな角度から景色を眺めた方がいいに決まっているのに、気の利かない奴だな僕は。

そう言つて千石が元いたベンチシートに座るため、席を離れようとするも、千石の手が僕の半袖を握つていて立ち上がれなかった。

「な、撫子。高いところが怖いな」

「いや……散々絶叫マシーン乗つて……」

「ある一定の高さを越えると、急に怖くなるんだよ」

「……………なら、仕方ないな」

それならば乗らなければいいとも一瞬思ったが、怖いものみたさという心理があり、

恐怖はある種の快樂に変わるものなのだ。

でなければ、絶叫マシーン然り肝試しなんかの、スリルを体験する催しが成立しなくなる。

だから、『怖いから乗らない』はイコールで結ばれるとは限らない。

なんたつてこの観覧車の高さは別格だもんな。それに加えて、この揺れだ。千石が怖がるのもなんら不思議ではない。

まあ全然怖がつてるようには見えないのだけど……。

「撫子、遊園地に付き合つて貰つたことへのお礼を、暦お兄ちゃんにしたいな。な……なんでも言つてみて」

隣に座つた千石が囁くような、か細い声で言う。

「急に言われても、何にも思いつかないし……いいよ、気持ちだけで十分だからさ」

感謝の気持ち、千石の申し入れは大変嬉しいことではあるが、そもそも今回遊園地に付き添つたのは千石へのご褒美なのだから、そんな気遣いは不要である。

「んん……でも………撫子、暦お兄ちゃんにお礼しなくちゃ、気がおさまらないよ」

だが千石は恩義を蔑ろにしない、出来た子だった。

「あ、そうだ！」

大きく手を打ちつけ、これは名案とばかりに代案を提供してくれた。

「こ、暦お兄ちゃんが欲しいなら撫子のパンツをあげるよ」

「何っ!? なぜ僕がそんなモノを! そんなモノ貰えるかよ!」

「ブラのほうがよかつたかな?」

「違う違う! 僕がなんで下着を欲しがるんだって話だ! どう考えてもおかしいだろ
!」

「こんな破天荒な発言はお前の担当分野じゃないはずだぞ、千石撫子!

「えっと神原さんが、いろいろ暦お兄ちゃんの好みを教えてくれたんだけど……違った
のかな?」

痛いほど納得したよ! ……あのヤロウ、千石に妙な教育施しやがって!

「在り得ないだろ! 断じて否だ」

どこに人様の下着を欲しがるとような男が居るってんだ……嘆かわしい。ああ、嘆かわ
しいったら嘆かわしい。

「あんな奴のいう事を鵜呑みにするな。信用するなら羽川のような真つ当な人間のこと
をだな——」

「ええっと……羽川さんに『もし阿良々木君が下着の類を欲しがってもあげちゃ駄目だ

よ』って言われてから、逆説的に欲しいのかなとも思ったんだけど……」

まさかの羽川さん！ 千石に告げ口をしやがったな……いや、千石への警告か——羽川って僕をあまり信用していないのか。結構シヨックが大きいぞ。

「なら、眼球を舐めてもいいよ？」

追い討ちをかけるように、千石が爆弾を投下した！

信用される要素など何処にもなかった。そんな赤裸々なことまで話ちやうのかよ！

羽川翼ああああ!!

「いやいやいやいやいや……どこに、人様の下着を欲しがって、胸を揉むより、眼球を嘗めたいなんてそんな高度な変態じみた真似をしたがる奴がいるんだよ！」

「胸を揉む？ 何かなそれ？」

「ツー！」

ウルトラ・ミス！

そこまで詳細には伝えてなかったのか！ 自ら墓穴を掘っちまったぜ！

「あ。そう言えばララちゃんがおっぱい揉まれたって、そんな話を……『妹の胸は、胸のうちには数えられないとか言って毎日毎日触られて、やんなっちゃう』って言ったような……」

「あのヤロウ……勝手に話を捏造しやがったな、そんな頻繁に毎日触るわけないだろう

に……」

「つてことは触ったことはホントだったんだ」

ボソリと千石が刃物のような言葉を呟く。

「ツ!!」

誘導尋問だった。

なぜか千石は軽蔑の眼差しではなく、悔しそうな表情になっている。

「だったら撫子も、曆お兄ちゃんにとつては妹みたいなものなんだし……撫子の胸もさわっ——」

「馬鹿な。どこに妹の胸を行きがけの駄賃とばかりに揉んだり、キスしたりする兄がいるんだよ……はははははははは」

千石が取り返しのつかない発言を言い切る前に、早急に弁解をはかる。嫌な汗を流しつつ、空々しく口を開く僕だった。

「キスつてどういふことかな?」

「アツチョンブリケ!」

思わず、医師免許を持たない凄腕の闇医者に付き従う助手の口癖が出るつてもんだ。連鎖反応。芋づる式で、どんどんと僕の性癖が明るみになっていく!

いつそののまま、八九寺関連の事も続けて打ち明けてしまうのも一興かと思つたが、

僕の利益は微塵もなかったのでやめておく。僕の人生を振り返ってみると、ほんと救いようがないよな。

「撫子は天使だから……暦お兄ちゃんのお願いなら、何だつて叶えてあげるよ。暦お兄ちゃんはお願ひする以外、選択肢はないんだよ！」

改めて、千石が宣言する。もうこれは命令とも言える領域だった。こうまで強く言われてしまったら、もう断ることも出来ない……か。

ならば、ここは当たり障りのないお願ひで切り抜けよう。

「じゃあ、後でジュースでも奢ってくれよ、それで十分満足だからさ」

「え？ 何かな暦お兄ちゃん。風で良く聞こえなかった」

いや、風は吹いてはいるけど、ゴンドラ内に居るから風音なんてそれほど聞こえはしないのだが……まあ千石が聞こえなかったなら仕方がない、再度言い直すことにする。

「帰りにでもジュースでも奢ってくれよ」

「え？ 何かな暦お兄ちゃん。風で良く聞こえなかった」

千石が意にすぐわれない要求は聞こえぬふりして同じ言葉を繰り返す、RPGの住人に

なつてしまつた!

『さつきまで普通に会話が成立してただろうが!』と、もう少しで、渾身のツツコミを放つていたところだつたが——これは、千石が僕の恩に報ようとした想いからきたものだ。

無理をしてこんな体裁を保っているにすぎない……はずだ。

その想いに応えてやるには、それなりに達成が困難なお願いしなければ、千石も気が済まないつてことなのだろう。

こんなにも気を遣わせてしまつて、申し訳ない限りである。

しかしながら難しい問題だなこれは。

折角だから、またサンドイッチでも作つて来て貰おうか……いや、でも今度一緒に作る約束してるしな……なかなか考えが纏まらない。

そんな風に思い悩んでいると、千石が更に問題を難しくした。

「制限時間はこの観覧車が地上に戻るまで……だよ」

時間の制約までついた!

この観覧車限定となると、必然的に千石に「何か」をして貰わなければならない。この流れで一体何を願ひするのが正解なんだろうか?

生半可なお願ひじゃ、千石は僕の提案を棄却してしまいそうだしな。正直もう機械的

な千石の声は聴きたくない。

だが、そうは言っても観覧車は動き続けているのだ。考えているうちに回りきつてしまおうだろう。

少々卑怯ではあるが、このまま時間切れで有耶無耶にしておまうか？

そんな浅はかな考えが過ぎたその時に——それは起こった。

不意にゴンドラ内に流れていたクラシック音楽が止み、観覧車内に取り付けられていたスピーカーから、アナウンスが聞こえてきた。

『観覧車をご利用の皆様にご連絡申し上げます。大変申し訳ありませんが、強風の影響により、暫くの間この観覧車は停止致します。安全確保の為の処置となりますので、何卒ご容赦下さい。大変ご迷惑をお掛けしますが、そのまましばらくお待ちください。安全を確認しだい、運行を再開します』

そんな一方的かつ事務的な声が流れたと思ったら、ガクンと大きくゴンドラが揺らぎ、停止した。

幸か不幸か、そこは観覧車の頂点部分、一番真上である。

どうやら、風の影響で観覧車が停止してしまっただけらしい。

停止したことにより、幾分揺れはマシになったが、それでもガタゴトと揺れ続ける観覧車。

これも僕たちの安全を考慮した結果の対策なので、文句を言う筋合いはないけれど、なぜ、こんな時に限って！

大いなる意思是、僕の逃げを許さないのか!!

特に千石はこの緊急事態——観覧車が止まってしまったことなど、気に懸けていないようだった。

千石は相変わらず、可愛いつぶらな瞳で僕が何をお願いするのか、見つめてくる。

「今なら、誰にも見られてないから、撫子、大丈夫だよ……」

傍らの天使が、そんな事を耳元で囁く。それは天使の囁りのはずなのに、何故か、悪魔の誘惑のように聞こえた……いったい何が大丈夫だと言うのだろうか……。

不思議だ。観覧車が止まったとは言っても冷房の類は作動しており暑くもない筈なのに、妙な脂汗が滲んでいた。

それに僕自身、あんなに怖がっていた、観覧車の高さや揺れなんかどうでもよくなってきた。

蛇に睨まれた蛙。
なぜかそんな言葉が脳裏に過ぎるのだった。

なでこエンジンくその6く

く010く

上空120メートルの狭いゴンドラの中。風で揺れているから静止とは言えないけど——時計で言うくと丁度12時の位置で、今はその動きを止めている。

退路は何処にも存在しなかった。

そもそも千石から逃れようとする思考に行き着いているのは何故なのだろう……だつて千石だけ。無害を体現したような、それこそ僕なんかよりもよっぽど人畜無害な人物のはずだ。

真横に座る千石をチラリと盗み見ると——千石はじーつと僕のことを凝視していた。僕が口を開くのを今か今かと待ち構えているといった感じ。

考え込む僕。さて………これは、どうしたものだろうか？

僕へのお礼と言ってくれているが、簡単な要望では納得してくれそうにないし、この観覧車の中で出来ることに限られている。しかも……神原や月火の影響（羽川も微妙に）——無論、悪影響で、千石はお礼というものを思いつきり心得違ひしてしまって、提

案する内容が不健全極まりないものになっているのが如何ともしがたい。

どうすれば最小限の被害……いやいや、真つ当な内容で済ませられるだろうかと考えを巡らせ、思考の海に——この場合泥沼といった方が適切かもしれない——埋没していると、千石が何やらウエストポーチをこそごとと漁り始めるのだった。

そして、千石は——お気に入りの小さなポーチの中から、筒状の物体を取り出し「どうぞ」と言つてそれを差し出してきた。手渡されるまま受け取る僕。

「？」

疑問符を浮かべながら、促されるまま怪訝に筒の蓋を外すと、中には携帯用の歯ブラシが入っていた………。

「これもララちゃんから聞いたんだけど、曆お兄ちゃんは人の歯を磨いてあげるのが好きだつて。やっぱり曆お兄ちゃんつて家庭的だね」

重ね重ねあのたれパンダ！ プライバシーの保護なんて何処にもあつたもんじやない！

あいつ、『家政婦は見た』ばりに妙な場面に出くわすからな……火憐との歯磨きの時然り、忍とのお風呂然り。八九寺との蜜月だけは絶対目撃されぬよう注意しなくてはと固

く心に誓う。

明るみになれば、ファイヤーシスターズ（主に火憐）にギツタンギツタンにされるかな……くわばらくわばら。

なんし千石の視点では、それは羞恥心——快樂に耐えるプレイではなく、お母さんが赤ちゃんの歯を磨いてあげているような微笑ましい光景として映っているのが救いではあるが……あれ？

でもこの流れで、この提案ってことはこの歯磨きプレイの真髄を見極めてるのか？ いやいや、そんな訳あるまい。千石は、僕が喜びそうな案を列挙しているだけに過ぎないのだ。

列挙されている内容はどれもこれも破滅的（僕の人生を狂わす意味合いで）なものだけど、それは人から又聞きした内容を千石が『選別差別』することなく口にしただけなんだから、彼女の意思は関与していない。

うゝむ……純真無垢、穢れを知らない千石は、周りの情報に流され、変に偏った考え方になってしまっている。

色に例えるなら、混じり気ない汚れなき『白』の千石は——下着は真つ白でも、腹の中は真つ黒くろすけな、我が強くどす黒い月火に、簡単に染められてしまうのである。

言うまでもなく僕の後輩、神原にも染められている——奴の頭の中は桃色18禁だ！

「……………あのな……………千石、観覧車の中で歯磨きは、おかしいだろ……………な」

説き伏せるような口調で僕が言う。

自室のベッドの上での歯磨きも、十分おかしい部類だと重々承知しているので、その件に関しては何も言わないでほしい。

「……………うん、そうだね」

千石が残念そうにはあるが、一応の理解を示してくれた。ふう……………危なかった……………どうやら危局は回避できたようだ。

「だったらこれは、今度暦お兄ちゃんの家遊びに行つた時の為にとっておくことにするよ。時間が余ったらサンドイツチ作り挑戦だね！」

回避出来てねえ！ 問題が先延ばしになっただけじゃん！

てか優先順位間違つてませんか千石さん。メインはサンドイツチ作りのはずだろ!?

切実に千石の記憶から消え去つてくれる事を祈る。でも千石つて記憶力がすごい！
いもんなあ……………期待は望み薄か……………。

次いで千石が、悩み苦しむ僕の代わりに、代案を提示してくれた。

「撫子……こ、曆お兄ちゃんになら、何されてもいいよ……例えば……撫子に……キ、キス、してもいいんだよ」

しどろもどろつつかえながら、千石がそんな事を口にする。幾らなんでも大胆と云うか、僕に気を許しすぎだろ！

これはきつと世に言う『吊り橋効果』が発生しているのではなからうか。

幾ら千石が怖がつていなさそうに見えたところで、その内心まで読み取る事は不可能だし、本人だつて高いところが怖いといつていたじゃないか。

それに、安全確保の為とはいえ、閉じ込められているのと変わらない状況だし、吊り橋が揺れるように、このゴンドラも揺れている。

その所為で、一時的な興奮・極限状態に陥つて、気が動転してしまい、本来在り得ない台詞をを口にするのも致し方ないことだろう。

断じて、吊り橋で——高い所に上つたら、誰彼かまわず人を突き落としたくなる心理現象のことじゃないので悪しからず。

「千石、わかつた、わかつたから」

このまま千石の案を訊いていたら、なんだかどんどんとエスカレーターしていつてしまひそうさ。やむを得ず千石の口上を遮る。

「“わかった”ってことは、キスでいいってことだね」

……………日本語ってムズカシイ。

早急に誤解を解かなくてはと思ったものの、他に代案があるわけでもない——何としても当たり障りのない、健全なお礼内容にしたいのは山々だったが、傾向からみるにそっち系の要望でなければ了承を得られそうにないのもまた事実。

「うん……………それでいこう」

意思疎通の失敗、言葉のやり取りの齟齬が招いた成り行きによるものだったが——僕は千石の案に頷いた。

というのも、こののつびきならぬ状況を打破する『尾張幕府家鳴將軍家直轄預奉所軍所総監督の奇策士』もかくやという奇策が思い浮かんだからだ。

熟考を重ねることなく思いついた、急場凌ぎの作戦なので、うまくいくかは神のみぞ知るといったところなのだけど、動き出さなければ何も始まらない。

ってそんな作戦を、奇策と称するのは奇策士に失礼甚だしいか……と、いうことでこれはただの苦肉の策——窮余の一策である。

ただ、やれることだけはやっておかないと、無残に喰われてしまうのが関の山だからな……………んん？

喰われるって、何を捕食さる小動物のような事を言っているのだろうか。僕も気が動

転して思考が支離滅裂だな。

唯一の気がかりである、僕の声が聞こえないという現象も、千石から提案したものだから大丈夫なはず。

「ほ、ほんとにつ!?!」

当の千石は、僕の言葉を聞いて両手で口元を覆って目を大きく見開き、信じられないといった風に、吃驚していた。

やはり相当無理をしていたんだな。このキスの一案も、きつと誰かに入れ知恵されたものだったのだろう。

「千石。やつぱりお礼なんていいからさ——」

「駄目! もう受理されちゃったから、曆お兄ちゃんは撫子にキスする以外ないんだよ!!」

受理されちゃったのか……………千石の雰囲気からみるに取り消しは出来そうにない……………よな……………。

（0115）

「暦お兄ちゃん。ど、どうぞぞ」

千石が僕の方に向いて、首を上に戻らす。

心持ち、唇を突き出すような感じで、完全にキスを受け入れる体勢に入ってしまった。けれども、まだ僕の「準備」は整っていないのでそれは困る。

「その前に千石——その天使の輪っかを僕に貸してくれないか？」

「ん？ これ？」

千石が自身の頭上を指差しながら、僕に確認してくる。

「そう、それ」

「いいけど、暦お兄ちゃん。これ、どうするの？」

不思議そうに首を傾げながらも、輪っかを頭から外して渡してくれる。

カチューシャの用途も含めて使用していたので、天使の光輪を取った事によって、前髪が垂れ下がり目元が隠れ、いつもの感じに戻ってしまった（髪型は三つ編みなのでうける印象はまた違うけど）。

「ま、気にしないでくれ。で、千石。悪いんだけどさ……………目を瞑ってくれないか？」

千石の問いかけははぐらかしておいて、僕はキスをする前の常套句を口にする。

アニメ的表現をするのなら、*〱*みたいな力一杯目を瞑っていた（参考までに——恋愛サーキュレーションで千石が『そう、そんなんじややくダ』と歌っているシーンのようにだ！）。

「千石。そのまま少しの間じつとしててくれ」

「うん……わかった」

僕はそう言つて席を立ち、千石に“背を向ける”かたちで直立した。

依然、ゴンドラはぐらついている。転ばないようにバランスを保たなければ体勢を崩して転んで仕舞いそうだったので、その点は注意しておく。

千石に感付かれないように細心の注意を払いながら、受け取つた天使の光輪を股の下に掲げる。いや『股の下に掲げる』という表現は間違つているので言い直そう。

正鵠を射た表現、僕の行動を正確に言い表すのならば、僕の足元にできた影——夕焼けの赤い日照、ゴンドラに付けられた電灯によつて生じた、“僕の影”の真上に丸い天使の輪を掲げているのである。

そして僕は——

「お。こんな所にドーナツが」

千石には聞こえないように蚊が鳴くような小さな声で呟く。千石には聞こえなくても、「奴」になら聞こえるはずだ。

僕の思惑通り——足元にできた影の中から、金髪金眼の外観年齢八歳ぐらいの幼女が姿を現した。とは言っても生首よろしく頭部しか姿を現していないので、なかなかホラーな光景である。

光ある所に影があり、影あるところに忍あり。

もう今さら説明するまでもないだろうが、紹介しておこう。

忍野忍。

吸血鬼としての名を失い、今ではその名——『忍野忍』という名前で「縛られ」ている。

元は怪異の中の怪異、怪異の王、怪異の頂点に君臨する者。不遜な態度に貴族としての風格、気高き誇りと自尊心、矜持を胸に宿し、絶対者としての貫禄を有する最強の吸血鬼………だった吸血鬼の成れの果てにして、美しき鬼の搾りかす。

なんて文句は、残念ながらも適切とは言えないよな………というわけで、こつからが忍野忍の本当の紹介でしょう！

俗世の影響をもらうにうけ、春休みにみせたカリスマ性を微塵も感じさせなくなった墮

落した元吸血鬼。やけに古風な口調をしたドーナツ大好きな、幼き風貌のマスコットキャラクターである。

少なからずその人格形成——原因の一端を担っている身としては、複雑な心境だ。

容姿はまさに絶世の金髪美少女で、肌は透けるように白い。

また、その白さと同等のシルクで出来た艶やかな白のワンピースを着用しており（忍が物質創造能力作ったから材質については定かでないけど）、丁度僕がかざした天使の光輪が頭上にあることもあって、絵に描かれた天使が現実に舞い降りたかのようにあ
る。

千石も天使のように可愛らしかったが、世にある天使のイメージに近いのは断然こっちだった。その実、大別すれば、間違いなく悪魔に分類される吸血鬼もどきなのだけど。忍は——まだ時間帯的に、起きるには早かったらしく、実に眠たげな半眼だった。影から頭だけを出して、寝惚け眼で“何か”を探している。

僕は、首を左右に動かしキョロキョロ視線をさ迷わせている忍の首根っこを掴み取り、大根を引っっこ抜くみたいな要領で、地中ならぬ、影の中から引き摺りだし、すかさず、忍の口を手で塞ぎ、声を発せれないようにする。

我ながら惚れ惚れするような手馴れた手際だった（某小学生との交流で培った、スキ
ルだ！）

そんな訳で——忍野忍、ゲットだぜ〜！

し の ぶ デ ビ ル ～ そ の 1 ～

（ 0 1 2 ）

作戦の第一段階が完了し、軽い達成感に浸っている僕の頭の中に『何をするんじや、我があるじ様！』と、そんな訝しげな声が響く。

耳から入ってくるのではない、なんとも言えない奇妙な聞こえ方。

忍の口は僕が手で覆っているので、*“彼女の口から発せられた声”*ではないのだけど、無論この声の主は忍野忍だった。

有り体に言ってしまうえば、所謂*“テレパシー”*みたいなもので、空気を介さず、僕の脳内に直接声を響かせているみたいなの、そんな感じ。

これもまた吸血鬼の能力の一端なのだろうが、どういう仕組みかは解らない。

そもそも吸血鬼の能力は人智の及ぶところではない、説明をつけることなんか到底不可能な、常軌を逸した力なのだから、深く考えない方がいい。

分析して答が出るようなものでもなく、そういつたモノとして受け入れるしかないのだ。

ちなみに、この能力を使われたのは、これが初めてではない。

とある日曜日の事が思い出される――

その日は毎月一度の忍にミスタードーナツを買ってやる日だったのだが――運悪く台風が直撃、とても外を出歩けるような天候ではなく、ミスドに行くのを断念せざるを得なくなってしまったのである。

当然、忍にも諦めてもらおう他なく、その旨を告げ勉強に取り掛かった………が、忍が納得する訳がなかった。

そこからの忍は、駄々を捏ねる子供そのもので、喧しく喚き叫び、手が付けられなくなってしまうた。

始めのうちは宥めすかしていたのだけど、それも効果はなくて、やがて僕は忍を相手するのも煩わしくなって、耳栓をつけて羽川特製の問題集に専念し始めた。

その結果――お解かりの通り、ここで忍が件の耳栓など意味を成さないテレパシーが発動され、勉強どころではなくなり、暴風雨の中、ミスタードーナツに向かう破目になったのだった。

なんし、こうして忍が声を掛けてくるのも織り込み済みだったので、僕が驚くことはなかった。寧ろ、願ったり叶ったりである。

これならば、千石に忍の声を聞かれる心配がない。

僕の声に関しても、極力声を絞っておけば千石には聞こえないだろうし、忍の聴力をもつてすれば、どんな小さな声でも聞き逃すことはあるまい。

こいつも僕の血を昨日摂取したばかりだから、能力が底上げされ、聴覚も研ぎ澄まされてはいるはず。

当の本人は——まんまと誘き出されたとも知らず、困惑気味に念話を用いて、事態の把握に取り掛かっている。

『いや、そんなことよりも、ドーナツは何処じゃ！ つい先程、うつすらとドーナツの影が見えたはずなのじゃが』

“そんなこと”とは、僕が口を塞いでいることで、“ドーナツの影”ってのは、
「あれのことか？」

僕はそう言つて、猫の首根っこを掴んで吊るしたような状態の忍の向きを調整し、忍を捕獲する際に手放してベンチシート（当然のことながら、千石が座っている向かい側の方にだ）に投げ出した“天使の輪”を見せてやる。

忍が僕の影に潜んでいる時——影の中から見える景色が如何様なものなのか知る由もないけど、その輪っか状の物体を、寝惚けた頭で視認すれば、ドーナツと見間違えるのも無理はない。

まあ、僕が確信的に見間違わせたんだだけでさ。

しかしながら、疑似餌でもいけるのか。

これまでも似通った手段——本物のドーナツで忍をザリガニ釣りの要領で釣り上げるものがあつたのだが、これからは丸い輪っか状の物を常備しておくでしょう。

『な、何……じゃと!』

忍はドーナツだと思い込んでいたモノの正体を目の当たりにし、愕然となつていた。それは、この世の終わりを迎えたかのような絶望の満ちた表情だつた。

「どんだけドーナツに心血注いでんだ! お前のそんな驚愕した顔初めて見たよ!」と、声を大にしてツツコミたかつたが、ここは踏みとどまる。

千石に忍の存在が露見すると作戦が台無しになつてしまう。

眠たげな半眼から、ドーナツが偽りだつたと分かり驚きで目を見開き、次いで暗澹たる顔付きになつていた忍だつたが、そこから次第に目尻が吊り上がつていき鋭い目付き

となる。

眼光炯々——凍るように冷たくも、憤怒の炎を宿した瞳で僕を睨みつける。

幼き容貌が災いして、今一迫力に欠けるが、その表情からは、確かな怒りの感情が読み取れた。

『忍の一字は衆妙の門と言うが……いくら我があるじ様でも、こればかりは堪忍ならん。お前様よ！ この世にはついていい嘘と、悪い嘘がある事をご承知かつ!?』

切歯扼腕——憤懣やる方ないといった風に、忍が僕を責め立てる。

おゝ怒ってる怒ってる。

声を荒げての非難、抗議は尚も続き、その勢いは烈火の如く燃え上がる！

『お前様に今の儂の無念がお解かりかつ!? 儂の胸の痛みがお解かりかつ!? この身が引き裂かれ、太陽に晒され灰になるようなこの痛みが、お前様にお解かりかつ!? 然様な背徳行為を受けたのも、これほど悲嘆に暮れるのも生涯初の経験じゃ!』

生涯初の経験って、忍の人生が薄っぺらいものに思えてくるな……………。

忍の明かされていない歴史の中に——生きてきた、あるいは死に続けてきた五百年もの長きに渡る軌跡の中には、もっと壮絶なエピソード、哀調を帯びた物語があるだろ

うに。

別に陰惨な過去、或いは哀切な過去を望んでいるわけじゃないけどさ、シリアス展開の扱いが難しくなるぞ——それは、ドーナツ一つにも劣る物語になってしまふ。

『く……ううう……血涙を流す思いじゃ………どんな言い逃れをしたところで聞く耳持たぬぞ！ 無視じゃ！ お前様のことなんか徹底的に無視じゃ！』

怒りを通り越して、なんだか涙声になっていた。

いや、ほんとに泣いてる!? 泣いてるのか忍！

目尻には雫が溜まり始めており、あとほんの少しで流れ落ちてしまいそうだった。

忍が泣いてる姿を見るのは初めてじゃないけど（あの時は文字通り血涙を流してたな）、幼女の姿で泣いているのを見るのは初めてだった。

さすがに罪悪感に苛まれてきた……。

傍から見れば——8歳前後の可愛らしい幼女を、騙して泣かしている、大人気ない男子高校生の凶。

うわあ……あああ！ 何だ、この良心の呵責は！

いや、いや、いや！ こっちこそ騙されるな！

こう見えてもこいつの本来の姿は、500歳を越える大年増なんだぜ………。

駄目だ……どう足掻いても、どう言い繕ってみても、完全に僕が最低下劣の唾棄すべ

き下種野郎って烙印は消し去れないんだらうな……。

取り敢えず、疑似餌作戦は今回限りにしておこう……うん、悪いの完全に僕だしな。

無理やり閑話休題。

気を取り直して——食べ物への恨みは恐ろしいというし、僕としても、忍とは友好的な関係を築いていきたいのだ。

こいつもこいつで大人気ないというか、変に強情というか、この姿になってからの数ヶ月間、本当に僕と口を利いてくれなかったからなあ……。

折角喋ってくれるようになったのに、こんなつまらない事である時に逆戻りなんて堪ったものじゃない。

ただ、元怪異の王が取る報復が、こんな子供染みた真似だなんて、やるせなくなる……。

何にしても、聞く耳を持つて貰わなければ困る。

「おい、忍。悪かったよ」

反応なし。黙りを決め込む金髪金眼の元吸血鬼。

僕に首根っこを掴まれ、宙ぶらりん状態の忍は、僕から視線を外して、明後日の方向を向いてしまう。

手を捻って向きを変えても結果は同じ。

忍は首だけを起用に動かして——まるで強力な磁石で繋ぎとめられているかの如く、その向きから焦点を微動だにさせない。

それは僕の顔も見たくないと言う怒りの意思表示であって、決して泣き顔を見せたくないってそんな理由じゃないよな？

どうにか僕の方を向かせようと、口元を塞いでいる方の手で忍の顔を動かそうとするも、びくともしなかった。

とまあ、本来なら途方に暮れるところではあるけれど、ドーナツが元で仲違いしたのなら——

「ミスドに連れてく。だから僕の話を読んでくれないか」

『なんじゃ？ 傑物たる我があるじ様よ』

——その解決もそれに任せてしまえばいいのは単純明快にして一目瞭然。

効果は抜群、忍に聞く耳を持って貰った。

その顔には涙の跡など見当たらず（うん、忍が泣くわけじゃないじゃないか）、満足そうな至福顔があるだけだ。

簡潔に、迅速に、事も無げに——僕と忍は和解した。

（013）

「正確には、僕の頼みを訊いてくれないかって事なんだけど」

『ふっ……愚問じゃな。我があるじ様の命令とあらば、儂はただ従うのみじゃ』

忍が僕の言葉に耳を傾けてくれる。

命令という表現を用いるのは僕的には好ましくないが、これは——忍が自身の対面を気にした故の言葉のセレクト、僕の遠慮を取っ払うために用いた言葉なのだから、ここは好意を素直に受け取って流しておく。

僕は、忍に命令する立場になんてなるつもりはないし——できるのは、ただ情けなく懇願することだけだ。

「まずは、このまま声を出さず、このテレパシーみたいな状態を維持してくれると助かる」

『うむ』

この体勢——幼女の首根っこを引つ掴み、余ったもう片方の手で、口元を押さえ付ける、非人道的な体勢をこれ以上続けるのも絵面が悪いと思つていたので、忍が了承したのを確認し解放してやる。

千石が座るのは反対の、対面の座席に忍を下ろし、猿轡的な役割を担つていた左手も取つ払う。

『ほれ、なんでも言つてみるがよい。ドーナツのため………こほん、我があるじ様からの主命とあらば、無碍には出来ぬ』

念話状態を維持させた忍が、ベンチシートの上で仁王立ちし無い胸をはつて——傲岸不遜な態度でそんな事を言う。

なんて扱いやすい……もとい、なんて頼りになる相棒だろうか！

「ありがとう、忍」

僕の感謝の言葉に、『主人に使役されることは、使い魔として避けられぬ使命じゃからな。甚だ不本意ではあるがの。あーなんとも不憫な余生よのお』と、言い訳がましくとつて付けたように——愚痴っぽく言葉を漏らす忍だった。

使役される、使命……………か。

僕の元主人でありながら、現在は僕を主君に据える……据えることしかできない彼女——阿良々木暦の眷属に成り下がりが、僕の影に封印されてしまった伝説と謳われた吸血鬼。

明確な主従の立場は紆余曲折あつて明瞭としないのだけど——彼女自身は現時点に置いて、僕の事を主として見定めているようである。

しかし、『サーヴァント』って言い方だと、どこぞの英霊のように格好よく思えてくるよな。言葉の選択があざとい奴だ。

僕の事は『従僕』って呼んでたくせに！

『サーヴァント』ってのは、英語で『召使い』を意味する言葉で、言い換えてしまえば、忍の場合『下女』になつちまうんだぜ、これ。

物は言いようである。

つつても、満更誇張でもないところが何ともまた……………全盛期の力を発揮できれば、十分対等に渡り合えるのではなからうか。

宝具は『心渡』で……………つて、妄想が止まらなくなつちまう。今度ゆつくり考察してみよう。

まあ主人がこれではお話にならないし、そもそもあんな物騒な戦争に巻き込まれたくない。
マスター

『何やら酷く動揺されていたのは、影を通じてよく解つておる。はあ眠りに集中するのに随分と苦勞させられた。もつと平静を保てるように日々精進するがよい。まあお前様には土台無理な注文か。して、察するにかなりの強敵と見受けるぞ。お前様の心情を言い表すのならば、獐猛な——人を丸呑みできる程の大蛇と対峙しておるかのような心の乱れ具合じゃつたからな。並大抵の相手ではあるまい。如何なる相手であろうが、喜んでこの手を……この牙を血に染めようぞ。血湧き肉躍るのう』

そう一方的に勝手な事を捲くし立てた忍は、鋭く伸びた八重歯を——

吸血鬼でなくなつたとしても、確かな怪異としての証を——

人間との相違を——

吸血鬼としての名残である牙を——

僕に見せつけるようにして『かかつ』と高慢な態度で哄笑する。

「全然解つてねえじゃねえか。物騒なこと言つてんじゃねえよ」

『むむ、違つたか?』

確かに忍へ頼み事をする時は、往々にしてバトル関連のことが多かった気がするが、

今回はそんな展開になるわけない。

まあついさつきまでお眠だったのだから、状況を見極められなくても、仕様がないうろうけどさ。

ただ……僕が危機に瀕していると思っただけながら、睡眠を優先したのは如何なものか……めちやくちや薄情な奴だな、おい。

結果的にみれば忍の勘違いなのだから、変に話が拗れずに済んでよかつたと思うべきなのだが。

にしても、忍にはそんな風に伝わったのか？

気持ちのような不確定なものだからな、ちゃんと伝わらなくても仕方ないことだけど……千石を強敵って……大蛇って……。

僕がそんなこと思うわけ……思うわけ……ま、そんなことよりも、忍の協力を得られれば、百人力……いや百鬼力だ！

しのぶデビルくその2く

く014く

『ならば、何だと言うんじや？ まあ如何な命令であろうと従う……までなのじやが……』

忍個人としては、バトル展開がご希望だったらしく、幾分やる気をなくした御座なりの口調になっていた。

本当に任せてしまつていいのか不安になつてきた……。

でも、改めて聞き返してみると、とんでもない台詞だよな——如何な命令であろうと従う。絶対服従の宣言。

人間の欲には、いろいろあるけれど、支配欲つてのもまたその一つだもんな。

「じゃあ、『ワン』と犬のように吠えてみてくれ」

つい出来心で、ゴールデンウィークの折、朽ちかけた倒壊寸前の廃ビル、叡考塾にて忍に初めてドーナツを食べさせてやった時に（本来はあの軽薄な男、忍野メメへの手土産のつもりだったのだけど）、達成出来なかつた唯一の心残りを口にしたとしても、ま

あ、まさか、なれの果てにして搾りかすに成り下がったとはいえ、伝説とまで謳われた怪異の王。

その気高き誇りは、確固たる信念は、健在のはず。

『ワン！』

躊躇なしに言いやがった……ここは吠えたと言うべきか。

しかも、しゃがみ込んで両手を地面（座席のクッション部分だが）にそえて、いわゆる『お座り』のポーズに、脳内に響く声に合わせてリツプシンクまでも……完全に犬になりきっている。

ほんと、魔が差しただけで、本気でもなんでもなかったんだけどな……。

元貴族としての最後のプライドは、今この時をもつて見る影もなく消失し、落魄してしまつたようだ。

そんなにドーナツが大事なのかよ……なんて浅ましい奴なんだ……。

つっても、僕の言葉には絶対遵守と言つても過言ではない強制力があるんだもん………吸血鬼の主従のルールは血の盟約、魂の絆、絶対不可侵にして、揺ぎ無き掟。

主の命令には逆らえない。それが本人にとって、どんなに不本意で不条理で不合理な内容でもだ。

心の中では苦渋に耐え忍んでいるに違いない。

『ほれ、次は何をすればいいのじゃ？』

——ふっ……くっくっ、くくくくくく。

こんな容易いことで、ドーナツが食べ放題なんて、笑いが止まらぬ、濡れ手に粟の利益じゃな。あるじ様の扱いなんぞ、既に掌握しておるわ。造作もなきことよの。かつかつか、ちよろいの！』

心の声が駄々漏れである。

訂正。心の中では私腹……はたまた至福に酔い痴れ、僕の事を嘲弄してやがった。

何とも痛ましいくも居た堪れない話ではあるが、互いが互いに似たような思考だったんだな……犬は飼い主に似るとも言うもんな……この主人にしてこの使い魔サーヴァントありと言ったところか。

もし、世にいる犬の……ペットの思考が読み取れる道具があつたとすれば、案外皆、この忍みたくない思惑を抱いているのかもしれない。

餌を見せなければ、芸をしない犬つてのはよく聞く話だし、普段からの点数稼ぎに余念がないのであろう。

媚を売って、自身の生活水準を上げるのに苦心していると思うと、遣る瀬無い気持ちになつてくるな。

「そういや、『尻尾を振る』って言葉も、『媚びへつらつて、人に取り入る』って意味で使われている言葉だから、昔からそういう見解が持たれていたのだろうか。打算が渦巻く、シビアな世界である。」

あと聞き捨てならない台詞があつたな。僕は一言も食べ放題なんて言つてないぞ！

僕は「ミスドに連れてく」と言つただけだ。

言い換えれば、忍をミスタードーナツに連れてつてやるまでが契約の範疇で、そのま
ま何も買わず帰ることだつて可能なのだ！

食わせてやるとは一言も言つてない。これぞ叙述トリックの応用！ ただの屁理屈
ともいう！

と、そんな意地の悪い事をして、また泣かれても困るので（女の涙は武器になるとは
よく言つたものだ）、野口先生ぐらいの犠牲（出費）は覚悟している……が、まかり間違つ
ても食べ放題などあり得ない。

こいつの胃袋に底があるのか解つたもんじゃないし、それだけは断固として阻止しな
ければなるまい。

つて、こんな事をしてる場合ではなかつた。

千石を待たせているので、そこまで時間の猶予はないのだ。

忍への無茶振りが出来るまたとないチャンスに後ろ髪を引かれながらも、懸案事項である本題を切り出す。

「単刀直入に言う。お前、千石とキスしてくれないか」

そう。これこそが僕の考え出した作戦。

作戦はいたって簡単、僕の代わりに忍にキスをして貰って、千石に気付かれる前に影の中に引込む。

忍の俊敏な動きなら、その程度容易いことだろう。

名付けて、『忍法影武者』。

「忍」法が『忍』の名前にかかっているのと、影を通じた僕達だからこそそのネーミングである。

世に言う身代わりの術と言い換えてもなんら差し支えない。

あれ、何処からとも無く、ブーイングと、落胆の声が……あと僕のネーミングセンスの無さを嘆く声が聴こえてきた気がするぞ。

そして何とも不名誉極まりない名前で呼ばれた気もする。

僕のこと意気地がなく、情けない根性無しの駄目男、いざとなったら尻込みして二の足を踏んでしまうような侮蔑を含んだ名前で呼ぶんじゃない。僕の名前は阿良々木だ！

律儀に心の中で幻聴に対してもツツコミを怠らない、骨の髄までツツコミ体質な阿良々木曆である。

まあ気のせいなのだろうけど……気のせいのはずなんだけど……気のせいだったらいいのにな……。

『千石とはお前様の後ろに居る小娘のことか。ふむ、近くで見ると、本屋の小娘と性質も髪型もつくづく瓜二つじゃの』

千石の顔を見定めた忍が、徐にそんな謎めいたことを言う。

本屋の小娘？ 誰だそれは？ 僕にそんな知人はいないぞ？

『しかしなあ……あの作品は好かん』

作品？ 架空の話なのか？

苦虫を噛み潰したような顔になって、嫌悪を露にする忍だった。

『見た目は金髪の幼女でも、その実500歳を越える伝説の吸血鬼。まああつちは600歳前後じゃったかな。ううむ、キャラが丸被りで、いい迷惑じゃ。お前様もそう思わぬか？ 我があるじ様も、女をはべらすという性質ではあの年端も行かぬ教師といい勝負じゃろ』

………本屋で千石と似通っている性質………幼女の吸血鬼………そして女をはべらした教師？ つて魔法先生のことかよ!!

穿ったこと言うもんじゃありません！

そして、僕のことを何だと思ってるんだよ!! 僕にもあのサウザンド・マスターの息子さんにもいい迷惑だよ!!

『——して、その小娘とキス？ 儂には、お前様の言っている意味がわからん』
つて肝心な内容の方は今ひとつ伝わっていません。

『あくあれか。我があるじ様はサフィズムを鑑賞したいのか？』

僕が言及するよりも先に、一人納得したように忍が推論を提示するのだけど、

「サフィズム？ 何なんだそれは？」

今度は、僕が忍の言っている言葉の意味——“サフィズム”という語句の意味が理解できなかった。

『わからぬか？ お前様の想い人と、奴隷の小娘とのやり取りを散々目撃しておるじやろうに』

想い人つてのはガハラさん——戦場ヶ原ひたぎのことで、奴隷の小娘つてのは、もしかして神原のことか？

それにしても、奴隷の小娘つて……………神原本人が僕のエロ奴隷と公言しているのだから、忍に非はないのだろうけど、もつと言葉を選べよな…………。

「全然検討もつかねえよ」

『ふむ。そうか…………レズビアン——つまり女性の同性愛者のことで、現代風に言い直すなら、百合とかいったか』

「ちげえよっ!!」

最小限の声音を用いて、一喝する僕。

あんなもん見ても全然嬉しくないし、僕にとつてそれは最近の悩みの種なんだ!

仲良きことは美しきかなって喜んででもいられない、一度は離縁してしまった二人が仲睦まじく交友を温め合うのは大歓迎だが、愛を育むのは遠慮して貰いたい。

Sつ気のある戦場ヶ原と、そもそも見られることに無上の悦びを感じる変態、露出癖、百合属性がある神原なのだ。

それこそ、わざと見せつけるように、あられない淫らな格好で、あんなことやそんなことまでっ!!

というか、また話が脱線してる。今は千石への対処が先決だ。

再度、早口で僕の計画の詳細を忍に伝えた——のだが、忍はなんとも曖昧に頷き、返事を返すだけだった。

「なあ、忍……お前、ほんとに解ってるのか?」

『お前様の目論みは重々承知しておるよ………しておるが……』

と言葉を濁してから、

『確認になるのじゃが、これは命令か?』

「違う。これは自分勝手な僕の願いだ」

『ふっ。かかつ、つくづく人のよいお方よの。その言葉、しかと承知した』

結局、甲斐甲斐しくも僕の言葉を受諾してくれたのだった。

（015）

「じゃあ千石……いくぞ……」

「うん、曆お兄ちゃん……撫子は、いつでも準備OKだから……」

僕の声にびくりと反応したが、それも一瞬のことで、すぐに受身の態勢——そつと唇をつき出す千石だった。

薄目を開けているのを指摘したこともあり、今も双眸はしっかりときつく閉じられていた。

僕の頼みの綱であるところの忍は、僕と千石との間に佇立状態で、いつ千石にばれてもおかしくない、綱渡りの状況である。

取り敢えず現時点においては、忍の存在を気取られた様子はなく、忍と千石の背丈の問題も、千石が座っているの、丁度いい塩梅の高さだった。

上手く事が運ぶかは、忍の綱の太さに祈るしかない。

しかし、千石を騙すみたいで、あまりいい気分じゃないな。

それでも、僕にとって大切な妹的存在の女の子の唇を奪うなんて真似は、どう考えてもよくない。

心苦しくはあるが、ここは適切な処置として一時凌いでおいて、千石が落ち着いたら、

事の詳細を伝えればいい。

千石もこの極限状態で、パニック症状に陥って、冷静な判断力が欠如しているに過ぎないのだ。

嘘も方便つてことで……………。

と、それらしい言葉で言い逃れし、言い繕うことはここまでにしておく。だつてそれは全て自分に都合のいい自己弁護にすぎないのだから。

僕には、阿良々木暦には——戦場ヶ原ひたぎという歴としたとした彼女がいるのだ。それこそ、妹達の唇を奪った僕だけど、千石は——いくら妹的存在とは言っても、それは妹ではない。

僕は千石を一人の女性として見ているのは確かで……大変不本意であるのだけど、節操なしで名を馳せている僕だから、僕だからこそ、本当に越えてはいけない一線はわかつているつもりだ……………。我ながら説得力に欠ける発言だとも承知している。

(頼んだ、忍……)

心の中で一任し、「千石、いくぞ」と、千石に向けた言葉でありながら、その実——忍

への合図を送る。

事の次第を見守るため視線を下に向けると、なぜか力強く鋭い黄金の眼と視線がぶつかる。

合図を送ったら直に行動するように頼んでいたのに……何やってやがんだ？
早くしないと、千石に気付かれてしまう。

怪訝に思っていると、忍が笑みを——それは取って置きが悪戯を試そうと目論んでいる子供が浮かべる、無邪気さと邪心が織り交ぎった、不敵な笑みと酷似していた。

なんだその表情は、と僕が言い知れないおぞましさに襲われたのも束の間！

急転直下——そこからは怒濤の展開、刹那の早業だった。

瞬きする間に起こった不測の事態なのだが、僕にはその一連の出来事が、あたかもスローモーションのように感じられた。

バナナの皮で滑って階段から落下するとうような危機的状況に見舞われたとすると、その瞬間、周りの風景がやけに緩慢になったり、様々な思考、通常では在り得ない

ほど多くの感情が駆け巡ると聞く。

死活に関わる状態になると、脳の処理速度が跳ね上がり、どうにか状況の把握に専念しようとするのだとか。

どうにも感覚的な話なので、実証などできないし、錯覚、勘違いの類なのかもしれないが……。

忍が細腕を伸ばして（多少跳躍したかもしれない）僕の胸座を引つ掴むと、その掴んだ状態で下方——斜め下に一気に引つ張られる。

昨日僕の血液を摂取したばかりだから、忍の力は“人間”の比ではなく、不意打ちなど関係なしに抗う術などなかった。

されるがままに、バランスを崩され前のめりに倒れ込む。

当然、倒れこんだ先には千石が居て、依然、目蓋を下ろしたままの唇をつき出した体勢で、僕の口付けを待ち構えている。

胸座を掴まれている関係で、必然的に顔が、というより頭部が押し出されているので、このままでは千石に頭突きをお見舞いする破目になってしまう。

血塗れの惨状が瞬時に脳裏に過ぎり、咄嗟の判断で首を上逸らす僕。僕自身も忍に血を分け与えた相互作用によって、動体視力や身体の反応速度が普段より底上げされて

いた賜物だった。

だが、それは最悪を回避しただけであって、このままでは衝突事態は避けられない。避けられない——はずだったのだが、いくら時が経つても（数秒に満たない僅かな時間ではあるが）、痛みも衝撃もなく僕は文字通りの意味で、千石の“目と鼻の先”で——、吐息がかかる距離——、紙一重の隙間を保つて——、僕の唇と、彼女の唇がぶつかる間際——、唇が触れ合うその瀬戸際で静止していた。

いや、この場合、“静止”という表現は適切ではない。

もつと正確に表現するなら“寸止め”である。有ろう事か寸止めされたのは、僕自身だ。

（忍、何しやがる!!）

声には出さず心中で非難を浴びせる……それが通じたのか定かではないが、忍が念話で語りかけてくる。

『阿呆』

忍は短く一言、呟いてから、

『あまり動揺なされるな。少なからず、儂にもお前様の心情が伝播するのをお忘れか？
気持ち悪くてしゃあないわ。ああああああ、何が悲しゆうてこんな呆気の眷属になつてしまつたんじやろうな……』

心底呆れたように、迷惑千万であるというように、侮蔑と落胆が合わさつた愚痴を漏らす。

『我があるじ様よ、これは忠告じゃが——こんな浅知恵、十中八九その小娘には看破されるじやろうよ。儂の唇と、お前様の——雄の唇が同一なわけなからう』

言われてみれば、そうかもしれないけど……それじゃ、万策尽きたつてことじやないか。

つて、それはそれとして、何で僕にこんな真似しているんだよ!?

『あまり儂を失望させてくれるな。女の一人や二人にたじろかされるとは実に嘆かわしい限りじゃ。ほれ、さっさとやつてしまえ』

そう言い残し忍は僕を見捨てて影の中に沈んでいきやがった。

この鬼！ 悪魔！ 人でなし！ ……いや、鬼だし、悪魔みたいなもんでもあるわけで、人でもないんだけどさ。

恩着せがましく言うつもりは毛頭ないけど、お前を助けてやった事、忘れやがったの

か!?

何が吸血鬼の絆は魂の絆だ！ 主従のルールは絶対で、主の命令はどんなに不本意なものでも逆らえない、じゃなかったのかよ！

「そんな責任転嫁も甚だしい思考に耽っていたのだが………僕は致命的な思い違いをしていることに、今更ながら気が付いた。

忍は僕に念を押して確認していたではないか。

忍に命令かと問われた僕は——これは自分勝手な僕の願いと、僕自身がそう宣言していたのだ。

そして、忍はそれを受諾した。

命令でないのならその裁量は忍に委ねられ、生かすも殺すも忍次第。

結果、僕の願いを棄却した。

拱手傍観——見殺しにした。

だが、その見解さえも大間違いだった。

この吸血鬼が……この悪魔が、そんな生ぬるい処置で満足するはずなかったのだ。

影に沈んでいったかに見えた忍が、最後に僕の足首を持つて体勢をくずさせ——断崖絶壁に追い詰めただけでは飽き足らず、最後には突き落としていきやがった！ とんだ『吊り橋効果』だ！

人の窮地をあざ笑うかの如く悪魔の所業。

その弾み、有ろう事か本当に……盛大に……八九寺との唇の端が触れ合ったというレベルの話とかじゃなく、真正正銘のマウスとウマウス。唇と唇。

僕は………阿良々木暦は、妹的存在である妹の同級生にして中学2年生の年下の純真無垢な、穢れを知らぬ女の子……千石の、千石撫子の唇を奪ってしまったのだった。

なでこエンジェル～その7～

く016く

やってしまった。やらかしてしまった。

こともあろうに、僕のことを兄のように慕ってくれている中学生の女の子から唇を奪うだなんて……………。

許されない暴挙、狂気の沙汰である。終わってる。完全に終わってる。

無垢なる少女に不埒な行為をしてしまったという罪悪感に、言い知れぬ背徳感、そして湧き上がる確かな色欲の感情で自己嫌悪になる。

ただこれは僕自身の意思ではなく、忍によって引き起こされた事故ではあるのだけど——そんなのただの言い訳にしかない。

そもそも、忍を頼ってしまったが故の、僕の過失とも言えるし。

『策士策に溺れる』『飼い犬に手をかまれる』そんな言葉が頭の中を過ぎ去る。

なんし、直にでも乙女の唇と密着しているという不道徳極まりない体勢から脱却しよう、千石の肩に置いている手に力を込め、離れようとしたのだけど——どういふ訳か

身体が動かない。

あれ？ おかしいな。なんでだよ？

それはあたかも金縛りにあつたかのように——、身体が凍り付いてしまったかのように——、或いは………影で縛られたかのように——、僕の意識が反映されず身動きすることが出来なかつた。

影で縛る……あながち比喩表現でも何でもなく、真実を言い当てた解ではないだろうか。

さもありなん。あいつになら——忍野忍になら、これぐらいの芸当容易いはずだ。文句のひとつでも言つてやりたいところではあるが、そんな状態でも、そんな余裕もなかつた。

だつて……今も尚僕は、千石撫子と唇を合わせたままなのだから。否が応にでも唇と唇が重なり合う確かな感触が伝わってくる。

千石の唇は潤いがあつて、とても柔らかく………つて、おいっ千石っ!!
僕は声にならない声をあげた。

吃驚仰天、驚天動地——僕のこの驚きを文字媒体で表すのなら、一ダース分の感嘆符が必要なぐらい。其れほどまでの驚愕。

その理由。その原因。

僕の唇を押し退けて『何か』が侵入してくる……いや、その正体はすぐに判別できた。間違いなく、それは………口付けを交わしている彼女の舌先——千石撫子が舌を入れてきているのだ！

普段の大人しい彼女からは想像もつかない、大胆かつ過激な行為。

僕への感謝を最大限に示すために無理しているに違いないのだろうが、千石の恩義に報いようという姿勢は、僕の想像を遥かに越えていた。超越していたと言っている。

唇を割って侵入してきた千石の舌先が、僕の舌の上で蛇のようにうねりを打つ。間断なく蠢き、時に貪るように舌を絡めると、一心に口内を嘗め回す。

戦場ヶ原とのベロチューだってこんなに過激なものじゃなかったのに！

大方、神原師範が伝授した不健全極まりない、余計な知識の一端だと思われるが、それを何の疑いもなく実行する、千石の澄み切った心には不安を覚えずにはいられない。

尚も千石による攻勢は続く。侵攻は緩まない。

千石は何を思ったのか——いやこれも神原辺りの教えを忠実に実行しているだけなんだろうけど、僕の身体に腕を回してしがみ付き、か細い体躯を寄り添わせてきた！

微かな香る甘い匂いと、人肌の温もりが直に伝わってくる。

ただでさえ身動きが取れない状況なのに、羽交い絞めされて……もとい、抱きつかれてしまった！

僕の心は嵐に見舞われた船のように揺れ動いていた。転覆寸前である。翻弄されながらも蹂躪されている。

心臓はぼつくぼくで、動転しまくりだった。

思考が蕩けてしまう………そして——数十秒にもわたる長き口付けを体験し終えた僕は、放心にも似た有様で、へたれ込むように座席に腰を下ろした（今更ではあるがいつのまにか忍による拘束は解かれていた）。

向かい合う僕と千石。

「撫子のファーストキスは……曆お兄ちゃんだね」

灰かに頬を染めた千石が、そつと唇に手を当て、つぶらな瞳を瞬かせ感慨の籠った声で言う。

「……そ、そうだよな……そうだったんだよな」

ファーストキス。初めてのキス。

あまりの過激なキスに、もしかしたら千石は疾うにキスなんか体験済みなのではと勘ぐってしまったが、真正正銘のファーストキスだったようだ。

「まだまだ暦お兄ちゃんにお返ししきれてないし、暦お兄ちゃんがして欲しいなら……もつと……する？」

意味ありげに——妖艶で淫靡に微笑する。

いつもの千石に似つかわしくない大人びた魔性の笑みである。

「ダ、ダイジョウブ、大丈夫！ もう十二分にお礼は受け取ったから。ほんと大丈夫」
声を裏返らせ、慌てふためきながら千石の申し出を辞退する。

僕は千石の唇を、ファーストキスを奪ってしまった（おかしな事にエナジードレインされた後のような心境の僕だけ）……しかもベロを絡ませたのデープなキス。

後に事の重大性に気付いて後悔するに違いない。時がたつて思い返せば黒歴史確定だろう。

悪い千石。不甲斐無い僕と、過激な口付け方法を伝授した神原の責任だ。

千石の偏ったお礼の概念は、羽川を通じてそれとなく去勢してもらうしかないか……いやしかし、羽川の洞察力は常軌を逸している。

あまりこの事が露見するのは避けたいからな……どこから情報が漏れるとも限らない。

戦場ヶ原にバレたとなれば、僕の明日が来なくなる。そこで試合終了だ（寿命的意味合いで）！

ここは責任を持って僕がそれとなく教えてあげるしかないか。

うくん……そうする事でより泥沼に嵌っているような——事態が悪化の一途を辿っているような気がしてならないのはどうしてだろう？

く017く

強風の為に一時停止していた観覧車が運転を再開し、地上に無事(?) 帰還した僕達は、そのままエンジェルランドを後にした。

地元の駅に到着したのは夜の10時を過ぎた頃。

行きは時刻表で時間を見計らっていったこともあり、スムーズに到着することが出来たのだが、帰りは電車の乗り継ぎのかみ合わせが悪かったりで、ホームで待たされる時間が多く、なんやかんやでこんな時間になってしまったのだ。

一本電車に乗り遅れることがどういふことなのか、どれほどの時間の損失を招くことになるのか……都会に住む人間には到底実感できない話だろう。

僕が住んでいる町の田舎具合を露呈することになってしまおうが、僕たちの地元を走る電車の数は基本一時間に1、2本とかそんなレベルなのだ。

なんし、僕が予定していたよりも、1時間以上も遅くなってしまった。

念のため千石には家に連絡をいれてもらい、親御さんに遅くなる旨は伝えているのだが、なるべく早く家まで送ってやらなければならぬ……ならないのだが駐輪所に止めてあった自転車を回収すると、雨が降り始めてしまった。

幸いにも千石が折り畳み傘を持ってきてくれていたので、千石の好意に甘えて、二人して一つの傘を共有することにした。俗にいう相合傘。

当然のことながら、傘をさしながらの二人乗りなんて危険な真似は出来ないので、自転車は押して歩く。

辺りはすっかり暗くなっており、等間隔に設置された街灯の光源を頼りに歩みを進める。

ホテルがある。

幾分錆びれた感じが否めない、壁面には蔦が這うような外装をしたホテル。

ただ、終電を逃したサラリーマンが、宿泊を要とするようビジネスマン向けのものはなく……愛を育み愛し合うホテルのほうだ。

看板に装飾されたネオンが主張するように煌めいている。閑散とした田舎の町並みからは浮いていること甚だしい。

眩暈などの蓄積疲労による突発的な身体の変調なのだから、千石が疲れを訴えた場所がホテルの前だというのは偶然だし、因果関係は皆無である。

千石を安静にすることを第一に考えるのなら、ここで休むのが妥当な考えなのだろうか……いやいや無理だつて。

僕、まだ高校生だぞ!? 相手は中学生だし入れるわけないじゃないか! でも、疚しい気持ちがないのであるなら、ここは紳士として休ませてあげるべきなのか?

散々に悩みぬいた末に、僕が出した結論は、千石をおぶって帰る”だった。

いや、これが正常な判断力をもった『お兄ちゃん』としての選択だろう。

駅からの帰り道なので、それほど家まで距離があるわけでもないし、千石の体重なんか軽いものだ。

自転車は違法駐車になってしまいが、ホテルの壁際において置き、後日回収すれば問題ない（もし誰かに現場を目撃されたら大問題だけど）。

まあ当然ながら僕が、その旨を伝えると、

「え？ い、いいよ、そんなの、曆お兄ちゃんに悪いし。この歳にもなっておんぶは恥ずかしいよ」

と、僕の申し出を断り「もう治った」と言い張る千石だったが、半ば無理やり僕の意見を押し通した。

千石にもしもの事があつたら、親御さんに顔向けできなくなるし、なにより千石の身体が心配だ。

それに、この町には高校生にもなつて妹に肩車された男がいるのだ。恥ずかしがる事なんてない。

実際問題、吸血鬼の後遺症が残っている僕からすれば、千石を背負うことなど造作もないことだった。うん、軽い軽い。

千石を背負つての帰宅の道中、千石はずっと謝り続けていたけど、そこまで気を病むこともないのにな。

最後の最後でヒヤツとしたが、なんとか無事千石を家まで送り届けることが出来た。
玄関前で振り返った千石はぺこりと頭を下げる。

「曆お兄ちゃん、本当に本当にありがとう。今日は楽しかったね」
「おう、そうだな」

楽しかったのは紛れもない事実だけど、今日一日のあれこれを思い出すと、楽しかったの一言で済ませていい問題でもないよな……。

戦場ヶ原への隠し事が日増しに増えている気がする。

「うん。それもこれも、全部曆お兄ちゃんのおかげだよ」

そう言つて、眩いばかりの笑顔を見せてくれる千石だった。

多少後ろめたい気分になつて僕だけど、この笑顔を見ただけ心が晴れ渡るようだ。連れて行つてあげた甲斐があつたというものだ。

「また、一緒にどこかいけるといいな。まあ直には無理かもしれないけど、千石の好きな所に連れてつてやるぞ」

「ほんとに?」

「ああ。次はどこがいい?」

「ん。曆お兄ちゃんと一緒なら何処だっていいけど………だったら、また曆お兄

ちやんの部屋に行きたいな」

相変わらず……なんで僕の部屋に限定するんだろうかこの子は。

でもサンドイツチの作り方を教えてもらう約束もしてるしな。遅かれ早かれ、家に来て貰って教えを請いたいものだ。

「ま、平日は受験勉強で少し難しいけど、日曜にならいつでも来いよ。千石ならいつでも大歓迎だからさ」

「うん、またお邪魔させてもらうね」

「まあそれはそれでいいんだけどさ。他には行きたい場所はないのか？ 遠慮なんていらないんだぞ。折角なんだから、動物園とか水族館とかさ、もつと娯楽にとんだ場所の方が千石だっていいだろ」

遠慮の塊のような千石は、これぐらい言ってやらないと、自分の中で考えを押し留めちやうからな。

そんな僕の押しが功を奏したのかは定かではないが、千石はやつとのことと、自分の考えを提示してくれた。

ただそれは、いち中学生としては風変わりな場所なのだけだ。

「ならチャペル……教会がいいかな」

控えめな声で千石が言う。

また信心深いというか……教会で何をしたいのだろう？ 礼拝でもしたいのかな？
あと教会でやってるとなると……うくん、ちつともわかないや。

でもほんと、欲のない子だよな。僕を氣遣つてお金の掛からない場所を選んでくれる
なんて。

私見ではあるが、千石つて清楚だし、慎み深いからシスターの格好とか似合いそうだよな。試しに修道服を着た千石を思い浮かべてみる——やばい、マッチし過ぎだ！

これは懺悔一回につき100円とは言わず1000円は徴収できる！

だけど教会はなあ……十字架あるし……僕自身は大丈夫だけど、忍とは——吸血鬼とはあまり相性がいい場所とは言えないだろう。

まあ忍が寝ている間を見計らえば問題ないか。

さて、そろそろ僕も帰らないとな。なんだか一仕事終えたみたいにな、どつと疲れが出てきた。今日はぐっすり眠れそうだな。

「じゃあ千石またな。傘、悪いな借りてく」

「うん、曆お兄ちゃん、傘は撫子が今度遊びに行った時に取りに行くね。じゃあ、また明

とまあ、こんな感じ。怪異が絡まない平穏な日常の一端、僕と千石の濃密な一日が
終わった。

なでこエンジェル～その8～

～018～

先に断っておく事がある。これは夢オチだ。

後日談というか、今回のオチ。或いは序章。^{プロローグ}

翌日、いつものように二人の妹、火憐と月火に叩き起こされる——より先に、僕は

目を覚ましていた。

昨日は一日中歩き回って疲れが溜まっていたこともあり、夜更かしすることも無く、日付が変わる前には布団に潜り込んで眠っていたので、どうやら起きる時間も前倒しになったらしい。

時計を見ると、まだ朝の6時になったばかり。

カーテンの隙間から、朝を告げる陽光が差し込んでいる。昨日の夜から降り始めた雨は既にあがったようだ。

窓を開けっぱなしにしていたようで少し肌寒い。

日曜だし、今日の予定は自宅で自主勉強するぐらいだろうか。

ちなみに昨日は祝日で学校が休みだったから、連休だ。土曜でも普通に授業があるから、有り難く祝日の恩恵を預かっている。

十分な睡眠時間も確保したことだし、偶には優雅なブレックファーストでも堪能しようかと思いつち、ベッドから抜け出そうとしたのだが——僕はそこで思いとどまる。

本末顛倒というか、大変理不尽な話ではあるのだけど、僕こと阿良々木暦は、勝手に起床する権利を有していない、とは言い過ぎにしても、勝手に起きて寝床を抜けると、奴

らに怒られてしまう。

奴ら——言わずもがな、僕の妹であるところの阿良々木火憐と阿良々木月火のことだ。

使命感からか、惰性からか、それも正義を行使する一環なのか検討もつかないのだけど、僕の妹達——ファイヤーシスターズは、僕を起こすという職務を、自身の権利として、自認しているようである。

つまり、例え僕が妹達に起こされるよりも先に目覚めたとしても、部屋の外に出ることとは勿論、ベッドから抜け出す事さえ禁じられているようなものだった。

まあ、あいつ等にとって数少ない登場シーンではあるのだから、その気持ちは酌んでやらないこともない………だけど、二度寝してまで、妹達に起こされたいなんて、これっぽちも思わない。

そもそも、その起こし方が最近エスカレートして（過去にはバールで寝込みを襲われたこともあったし、この前なんかは、熱々に茹だったおでんを鍋ごとぶっかけられそうになった。本気で洒落になってないし、僕はリアクション芸人じゃない）身の危険を感じている今日この頃だった。

僕が不死身に近い体躯を有していなければ、冗談抜きにして死にかねない——致命傷を負いかねない、起こし方をしてくれるので、僕としても第六感に任せきりではどう

にも心許ない。

怪我を負うのはいいとして、いや、ちつともよくないが、奴らの前でその傷が回復していくのを目撃されることの方が問題なんだよなあ。この体質というか、吸血鬼だった頃の名残、後遺症を妹達に見られるのは拙い。

然るに、こうして先に起きたのなら、取れ得る対策は取って置いた方がいいってことだ。

ぼーっと時計の針が進むのを眺めて、規則正しい人力目覚ましが来るのを待ち構えていると、部屋の外から話し声が聴こえてくる。

「うん、まだ部屋の中にいるみたいだね。昨日の夜から一步も部屋の外に出てないよ」

この声は月火のものだった。僕がこうして起きて待ち構えているとも知らず、呑気なものである。

ってあれ？　なんでこいつ僕が部屋から出てないなんて事がわかるんだ？　夜通し

ずっと部屋の外に居た訳でもあるまいし、夜中に催してトイレに行ったかもしれないじゃん。

「ふっふっん、何でわかる、みたいな顔になってるね、そりゃわかるよ」

一緒にいる火憐の顔色を読んだのだろう、月火が得意な口調でそんなことを言う。「だって、昨日お兄ちゃん寝静まったのを見計らって、ドアノブに細工をしておいたからね。一番上まで上つてるドアノブの位置を、元の位置から5ミリぐらい下げたおいて、蝶番のところにシャー芯を仕込んでおいたんだよ。ドアノブの位置も変わってないし、シャー芯も折れてない。以上の理由からお兄ちゃんは、この部屋から外へは出ていない」と言い切ることができるとわけだね」

何してくれてやがんだ、この妹はっ!!

同じ『月』を冠する名前だからって、デスノートの所有者みたいなことしてんじゃねえよ! しかも何気に本編とは用途の違う応用編だし!

「最近お兄ちゃん、夜中に抜け出す事が多いんだよね。大方、エツチな本でも買い漁ってるんだろうけど」

違う! それは忍に血をやり抜け出しているだけで、断じてエツチな本の購入など………そのうちの2割程度だ!!

「そうだね。静かにしないと気付かれちゃうね、ごめんごめん」

一方的に僕の人権を侵害していた月火だったが、相方の火憐の叱責でも受けたのか、やつと本来の目的を思い出したようだ。

まあ、その目的は、僕を起こすことにあるのだから、気付かれても問題ないと言えば

問題ないんだろうけど、*「僕が起きる」* ことに意味があるのではなく、*「僕を起こす行為」* に意義があるのだろう。

ガチャリと慎重にドアを開く音。

奴らが踏み込む前に、布団を頭から被つて起きていることを悟られないようにしておく。

さて今日は、どんな悪逆非道な、暴虐の限りをつくした起こし方をしてくる!?

傾向的に、火憐がいた方が、まだましな起こし方（少し内臓が飛び出してしまいそうな程度）になるのだけど、だからと言って油断はできない。

忍び寄る気配。

あ。そう言えば肝心の対応方法を何にも考えてなかった。これでは先に起きて待ち構えていた意味がないじゃないか!

兎に角、いつでも布団から抜け出せるように、身構えておく——

そうこうしている内に妹達がベッドの上に乗り込んできた。布団の両脇が沈み込む。

「お兄ちゃん、朝だよ〜」

月火の声。

そして、布団の上に手をかけ、繊細な動作でゆっくりと揺り動かしてくる。

お。いつになく優しい起こし方だな。普段はもつと激しくシエイクするみたいな起こし方なのに。

うん、兄を労わる気持ちが生まれたのはいいことだ。いいことなのだが、何か物足りなさも感じる。これでは、オチになってないじゃん、いらぬ心配をする僕だった。

やはり落しどころとして、僕が人肌脱ぐしかないようだな。
ふふふふふ、僕の悪戯心がむくむくと活性化していく。

僕は布団の両端を掴んで広げ、その状態で腹筋を駆使して跳ね起きる。

その結果——布団の上に乗っかって僕を起こそうとしていた二人をまとめて包み込むことに成功する。

「ちよ、何すんのよお兄ちゃん！」

「ひゃ、ひゃ」

布団に包まれ、袋の鼠状態になったファイヤーシスターズ。

月火が声を荒げ僕を非難する一方、火憐は柄にもなく、声が裏返ったような悲鳴なんかあげちゃたりして。

効果は靦面のような。油断するからだ、バーカ。

よし。まずは手始めに——布団の中に手を入れ、胸を揉みしだいてやるとしよう。

さあ兄妹のスキンシップの始まりだ!!

おつ。この感触は月火ちゃんの胸だな。まだ発展途上の青い果実のような頼りない膨らみ。うん、日頃揉み慣れた感触。

まあ、こんなことしても別段エロチシズムを感じることもないし、なんの罪悪感も生まれもない。欧米諸国で挨拶代わりにキスするような感覚で、僕は妹の胸を揉む、ただそれだけのこと。代わり映えしない日常の一コマ。

「ちよつ！ お兄ちゃん、妹のおっぱい触りすぎ！」

粗方下の妹の胸を弄った僕は、最早、定番になりつつある月火ちゃんの台詞を聞き流し、次の標的である火憐ちゃんをロックオン——一切の躊躇もなく、上の妹へ手を伸ばす。

「さあ次は火憐ちゃん。お前の番だ！」

「つてお兄ちゃん、そつちは駄目！ 駄目だつて！」

怒り心頭だった月火の声が一転し、なにか切迫したような、狼狽した声をあげる。

まあそんな事言われても、

「駄目と言われて引き下がる僕だと思っただか!？」

ふっ。僕は火憐ちゃんと月火ちゃんまで扱いを変えたりする、矮小な男じゃないぞ！
随分と見くびられたものだ。ちゃんと姉妹二人まとめて同じように相手してやるさ

!

月火ちゃんの制止の声など我関せずで、火憐ちゃんの肢体に手を這わせる。

なんだろう………そこはかとない、違和感が………。

布団に包まれている状態なので、一発で胸には行き着けず、一通りお腹なんかにも触れていたのだけど、いつもの引き締まった腹筋ではなく、妙に女の子らしい柔らかな肉質だったような気がする。

って今更ながら、火憐ちゃんいつになく大人しいよな。もっと反撃なんかされるのを想定してたのに。本来僕が想起していたオチは火憐ちゃんに返り討ちにあうオチだったんだけどな。

まあそれはさて置き、そんな訳で、何の抵抗もしない火憐ちゃんの胸をタツチ……いやキャツチした。驚掴みである。

一回、二回と僕が胸を揉むとそれにあわせて「ひゃん!!」とか「あん!」妙に可愛らしい声をあげる火憐だった。

うくん、なんだろう……火憐の奴……声変わりでもしたのかな？　なんだかいつもと声の感じが違う気がする。だけどこの声には聞き覚えがあるというかなんというかな……。

「なにしとんじやこらあああああああつ!!」

曖昧模糊とした形容できない心地悪さを感じていると、布団を跳ね飛ばし、般若の形相をした月火が一喝の下姿を現した。

当然のことながら、布団が取り払われたことにより、僕の手の先——より正確に言うのなら、おっぱいを揉み続けている相手の姿も露になった。

そこに居たのは、僕の妹“達”ではなくて……僕の妹、月火ちゃんと、妹的存在の――

「……………千石？」

千石撫子だった。欠片もなかった罪悪感が一瞬にして心の中を埋め尽くす。

「いや……なんで？」

意味不明だった。だって此処僕の家だぞ？ 千石が僕を起こしにくることなどありえない。それに火憐はどうしたのだ？

そう言えば、昨日の今朝方に何処かに行くとか言っていた気もしないでもない。

どっかに出掛けたつきり、一日二日帰って来ないことも日常茶飯事なので、火憐がないことは別段おかしいことではないか。

けれども、千石が僕の家にいる理由の説明にはなっていない。

となるとこれは……考えられる答えは一つ。真実はいつだって一つなのだ。

考えられる可能性——これは夢だ。なるほど、これが噂に名高い夢オチか。

「ふ〜」

大きく深呼吸を一つ。

「なあんだ。びつくりしちやっただぜ」

モミモミと、丁度手のひらに納まる柔らかな感触を堪能する。夢の中なのだから、普段出来ないことだって可能なのだ！

「暦お兄ちゃん、おはよう」

「あ……ああ、おはよう」

胸を揉んだ状態で挨拶を交し合う僕と千石。

うくむ……夢だとしても、面と向かって千石に挨拶されると気後れするもんだな。それに夢にしてはやけにリアルな感触だし、横の月火は喧しく喚き続けている。夢の中の出来事とは言え、こうして新たな一日が始まったのだった。